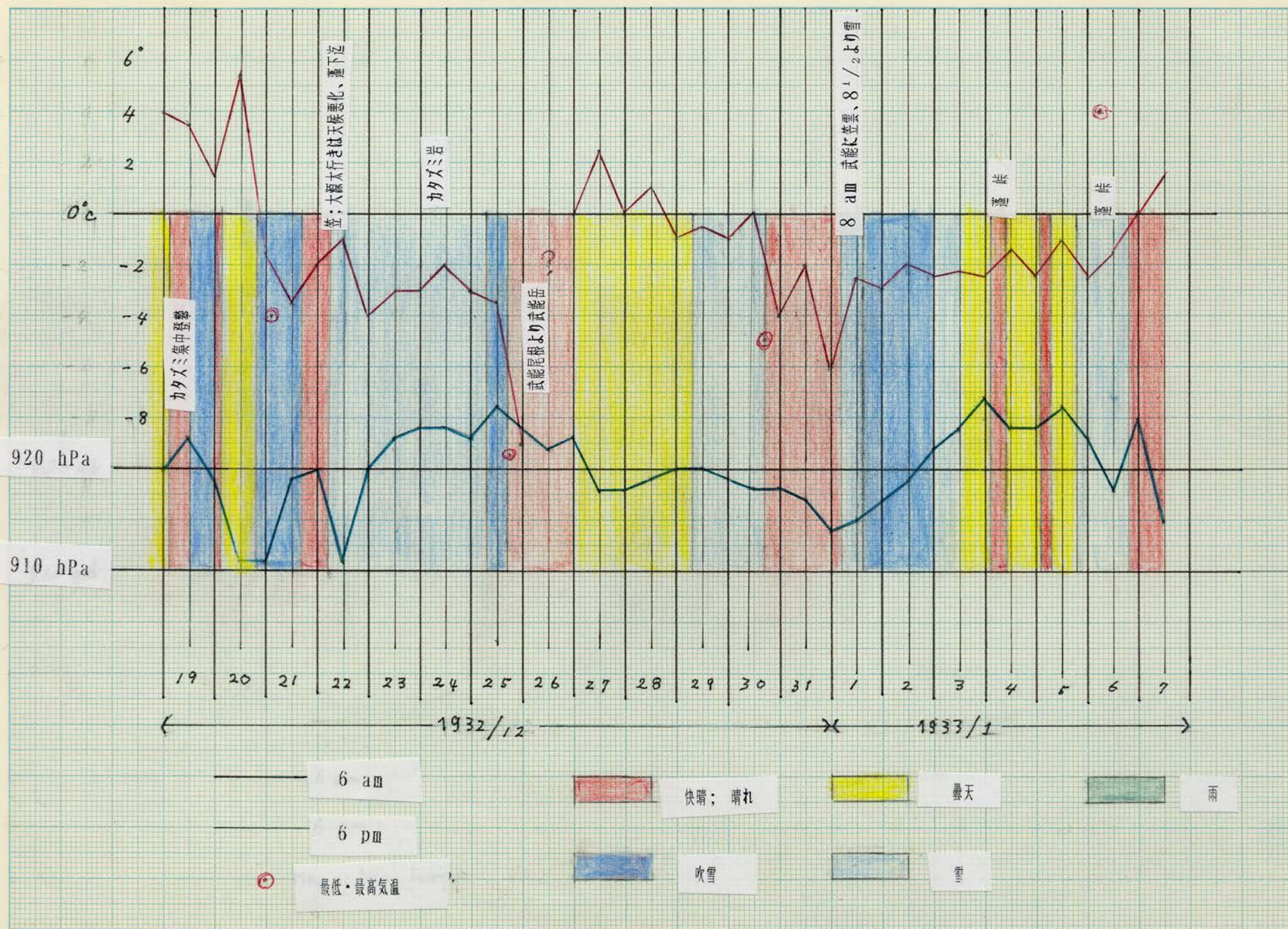


虹芝寮との70年、Ⅱ

虹芝寮の四季
土合 - 蓬峠
土合 - 芝倉沢
芝倉沢
芝倉沢 - 蓬峠
雪崩



気温と積雪： 寮建設当時と比べると最近では12月下旬～正月頃の積雪が非常に少ない。上に示した期間の平均温度は -1.3°C で元来それほど寒くないので、温暖化によるものも出来るが、此処に示した以外の資料が無いので断定は出来ない。手許にある資料から下記の地域の1,2月の平均温度を調べると、都市ではその規模によって明らかに温暖化の影響を受けているのが分かるが、軽井沢ではその影響は殆ど無いといえる。

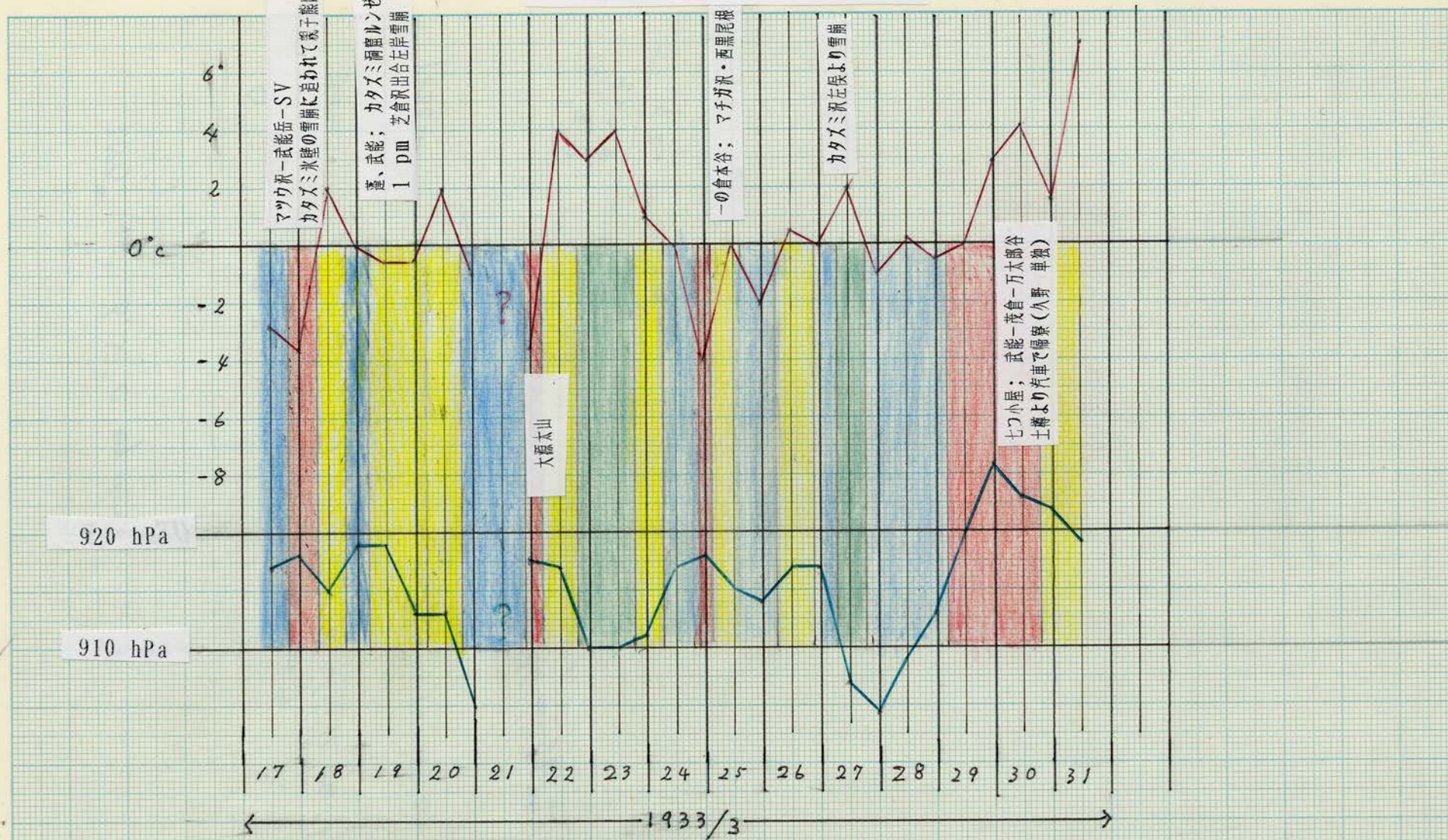
	1926-1950 ¹⁾	1951-1980 ²⁾	1975-2000 ³⁾			
東京	5.1*	6.1	7.1	+1.0	(16%)	1) 成蹊気象観測
前橋		4.2	4.6	+0.4	(10%)	2) 理科年表、1985
新潟		3.5	4.0	+0.5	(14%)	3) 理科年表、2002
軽井沢		-2.5	-2.3	+0.2	(8%)	* 都心に換算

次に雨量を (mm) を見ると：

東京	100	110	89	-21	(19%)
前橋		47	34	-13	(28%)
新潟		435	384	-51	(13%)
軽井沢		65	49	-16	(25%)

各地とも10%以上減少しているが、特に温暖化を受けていない軽井沢が25%も減少している。このことから寮付近の積雪が少なくなったのは、温度上昇よりも降水量の減少が直接の原因と推定できるのではないかと。ただし、雨量の減少も温暖化に起因するのかもしれない。

1933 春合宿時の気象



使用器材 気温: 水銀最高・最低寒暖計(寮の東側の立ち木に西向きに設置)
気圧: 携帯用アネロイド気圧計(寮内に設置—現在も我が家で使用中)。当時はmmHg単位であったので下記の式でhPaに換算。

$$1\text{mmHg} = 13.5956 \times 980.665 \times 10^{-4}\text{mPa}$$

観測時間 am 6.00, pm 6.00 (退寮日は正午、12/22はam 5.00)

晴: 快晴を主とし行動に最適の日 吹雪: 行動不可能な降雪 雪、雨: 概ね終日の降雪、降雨(スキー練習等は可)
曇: 時折の小雪、小雨の日を含み、また高曇りで行動可能の日を含む)

虹芝寮(標高: 825m)の標準気圧:

標準気圧 914hPa (この差は観測日数が少ないこと、バロメーター設置時に標準気圧を知らなかった為に、バロメーターの針を
冬・春観測値平均 921hPa 標高825mに合わせなかったためであろう。正しくは914hPaを825mに合わせるべきであった)

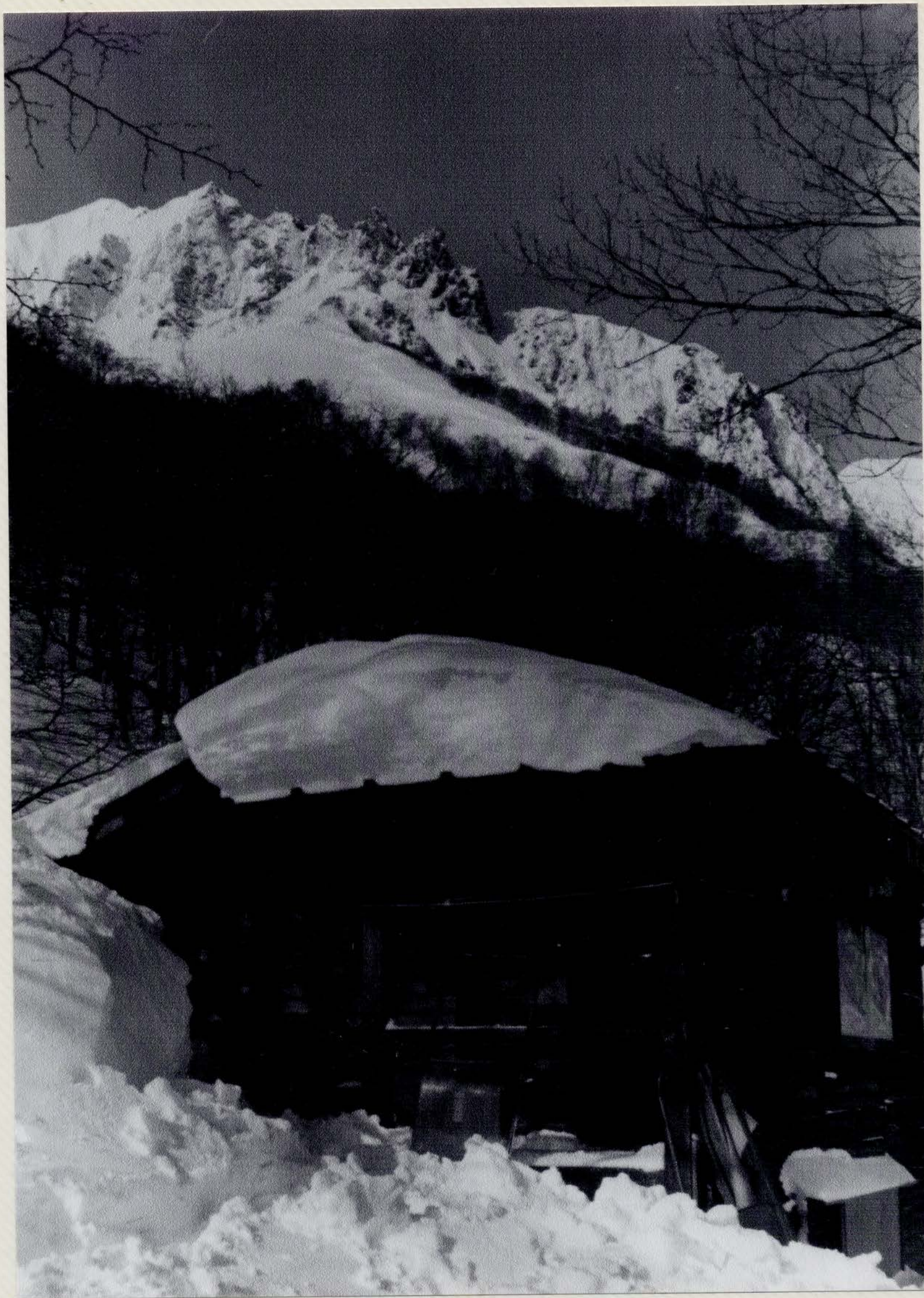
気温・気圧と天気の関係: ラジオもなく気象情報が全く入手出来ない状況下では天候を予測するには12時間毎の観測では、間が大きすぎて変化が読めなかった。この観測結果から強いて言えば:

- 冬期: ① 気圧は標準より高め、気温は平均気温(-1.3°C)より低めを保つ時は好天が期待できる(12/25-26; 1/3-5)
② 気圧が下降、逆に気温の上昇は荒れる前兆(12/20)
③ 気圧が上昇、逆に気温の下降は回復の前兆(12/21)
- 春期 ① 気圧・気温共に上昇は移動性高気圧の下に入り好天(3/28)
② 気圧・気温共に下降は気圧の谷(移動性高気圧の後)に入り天候悪化(3/20)
③ 気圧の上昇、逆に気温の下降は回復の前兆(3/21; 3/24)

武能岳に懸かる笠雲

1/1 am 6:00は前日にひきつずき雲一つない好天であったが、8:00に武能岳にぽっかりと綺麗な笠雲が懸かった。その直後から一面に曇りはじめ、8:30から雪が降りはじめ、この雪は1/3までつづいた。この前後の気圧、気温は12/31夕方より下降し寒気団の南下を思わせる。

以上の現象(春期の①、②を除く)が如何なる理由によるかは、当時の天気図がないので分からない。現在此の様な記録をとっておけば、天気図と対比して、この地域のローカルな気象の変化の予測に役立つであろう。



虹芝寮滞在記録

1932/ 8/26-27	宝川より、屋根の出来た 小屋に泊まる	2	
1932/ 9/14-15	命名ならびに開寮式	2	
10/29-31	薪運び	3	
12/18-1/ 7	冬期合宿	21	
1933/ 2/11-12		2	
3/22-28	春季合宿	7	
7/26- 8/ 8	夏季合宿	14	
1934/ 1/ 1- 7	冬期合宿	7	
4/ 3- 4		2	
6/30- 7/ 1		2	
7/23- 8/11	夏季合宿	20	
9/14-16	2周年	3	
12/29- 1/ 5	冬期合宿	8	
1935/ 2/ 9-11		3	96
東北大入学			
9/11-14		4	
12/23-1936/2/25南支那出張			
1936/ 7/19-23	家族、今村隆郎	5	
9/13-15	4周年	3	
1937/ 1/ 2- 7	冬期合宿	6	
1938/ 1/ 4- 8	冬期合宿	5	23
6月三菱鉱業KK入社、宮城県細倉鉱山勤務			
1939/ 1/ 2- 6	冬期合宿	5	
1/15:近衛工兵隊入営。			
1941/ 1/ 2- 4	冬期合宿	3	
1945/10/20,トラック島より復員。細倉鉱山復職			
1949/9/ 1- 2	只見川流域調査の帰途	2	
1951/1/5:兵庫県明延鉱山勤務; 1957/4/1:東京本社勤務			
1957/ 9/7- 9	25周年	3	
1961/6-1963/10;ヴァンクヴァー駐在			
1973/ 9/15-16	41周年	2	15
1974/9-1977/10:国連, ESCAP (Bangkok) 勤務			
1980/ 5/ 3- 5	西塚、紫築	3	
1981/ 5/ 3- 5	西塚	3	
10/10-11	寮 祭	2	
1982/ 4/29-5/3	山岳部雪上訓練。布施	5	
1983/ 5/ 3- 6	布施	4	
10/ 8-10	寮 祭	3	
1984/ 2/17-19	雪下ろし。石橋、高橋	3	
4/28-30円山、	布施	3	
9/ 1	成瀬氏遺族案内	1	
10/13-14	寮 祭	2	
1985/10/11-13	寮 祭	3	
10/23-25	家内と犬と	3	

1986/ 4/30-5/ 4	TBS撮影	5	
12/27-29	翁村、塩瀬	3	
1987/ 4/30-5/ 2	松平	3	
1987/12/27-29	翁村	3	
1988/ 5/ 3- 5	井草	3	
10/29-30	寮 祭	2	
12/23-25	松平	3	
1989/ 5/ 2- 5	井草	4	
1990/10/13-14	寮 祭	2	
1991/12/14-15	塩沢他3 (東北大山の会)	2	
1992/ 2/16-18	雪下ろし、熊崎他現役3	3	
4/ 4- 6	JAC山岳スキー講習会	3	
5/ 1- 4	布施、石橋、高市他2	4	
10/ 3- 5	60周年	3	
1993/ 3/ 2- 4	塩沢、玉木 (東北大山の会)	3	
4/29- 5/ 4	布施親子、福田、川田他	6	
6/18-20	第2回TBS撮影、 寮整備	3	
10/ 9-11	寮 祭	3	
1994/ 2/16-18	雪下ろし	3	
4/29- 5/4	翁村、小林(山の会)、他	6	
10/ 9-10	寮 祭	2	
1995/ 6/23-25	寮整備	3	
7/26-30	中学山岳部合宿、松平	5	
10/28-30	寮 祭:渡辺他;塩沢 他(山の会)風呂設置	3	
1996/ 2/16-18	雪下ろし。小林、岩田 (山の会)	3	
4/27-29	現役合宿;熊崎夫妻、 鈴木	3	
6/21-23	寮整備	3	
10/26-27	寮 祭	2	
1997/ 2/15-17	雪下ろし	3	
5/ 1- 3	布施、西口	3	
6/27-29	寮整備	3	
10/25-26	寮 祭	2	
1998/ 5/ 1- 4	梅沼他	4	
6/26-28	寮整備	3	
10/10-11	祭、上村他17	2	
1999/ 5/ 1- 3	西口、梅田、堀口夫妻、 川田他	3	
9/15-16	西塚を迎えて、鈴木、 山中	2	
10/23-24	寮 祭、井草他21	2	
2000/ 2/11-13	雪下ろし	3	
5/ 1- 4	布施、梅田一家、西口他	4	
7/ 1- 2	寮整備	2	
10/28-29	寮 祭	2	
2001/ 2/24-25	雪下ろし	2	
6/16-17	寮整備(上州三峰の帰途)	2	
10/ 8-10	寮 祭	3	
2002/ 2/ 9-11	雪下ろし	3	
4/27-29	川田、布施、角田、他	3	
10/26-27	70周年	2	179

冬 (12月末 - 3月上旬)



戦前の合宿の頃と比べると12-1月の積雪は少ないようだ。
この頃はX-mas, 正月を祭で過ごそうと呼び掛けても、賛同する人がいない。入寮する人も極く稀で、積雪、気候等のデータは殆どない。

1932(s7)/12/22-30
申田孫一氏撮影



1986/12/27-29
同行: 翁村、塩瀬

88/12/23-25

この時は雪はまだ根雪となっておらず、土合からの道は一応全工程スキーを付けて来たものの地表と雪との間に空洞があり、ラッセルした後でもう一度潜ると言う思わぬ苦労があった。松平氏はCDを担ぎ揚げ、荷が重く一の倉沢から懐中電灯の世話になり、寮到着は18時を過ぎていた。炊事の下水が出口で詰まって排水が寮の入り口の方に流れ、雪を融かしていたので入り口の除雪をしないうですんだ。今回は入寮に苦労はしたもののE. Kunzの歌うドイツ歌曲を聞き二人でX-masを楽しんだ



1987/12/27-29, 同行 翁村
雪は少なく、笹が出ていた。この時は天気がよく、蓮峰をめざしたが、
雪が少なく、芝倉沢、武能沢何れもスキーを脱いで渡り、七曲がりの上
部では藪こぎもあり、時間を要し白樺尾根で引き返す。





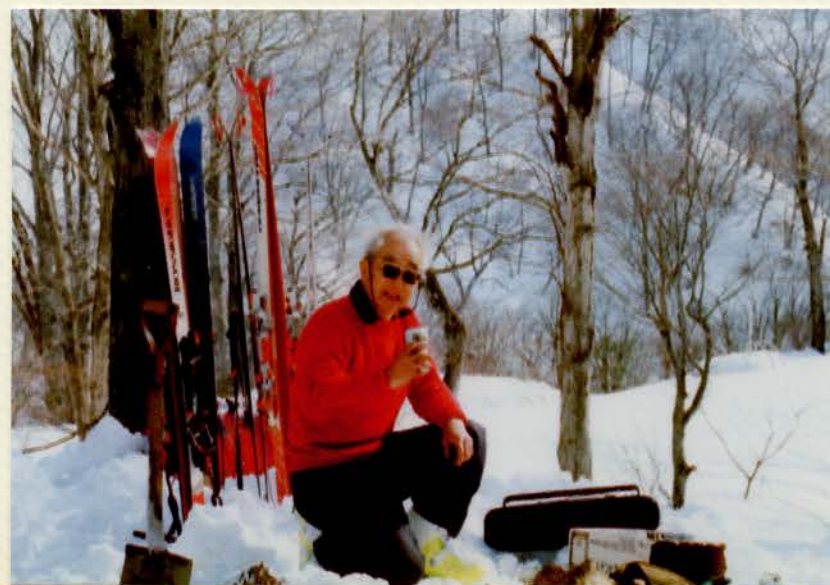
1984/2/17-19

石橋、高橋と3人で雪下ろし。この年は稀に見る大雪で、夜中に寮に着いたが(途中雪はしまっていて、ラッセルなし)寮は見えない位であった。マチガ沢から一の倉沢間は湯槍曾川添いに行けた。翌日から烈しい降雪。シールを付けて下る。



1992/2/16-18

熊崎、現役3名の5人で雪下ろし。珍しく二日とも快晴(このようなことは初めて、その後もなし)、雪の量も少なく、楽しい作業であった。



1994/2/16-18
積雪は1992の時の1.5倍。作業日の17日は終日降雪。
屋根は再び白くなった。18日撮影



2000/2/11-13
現役部員が遭難事故などで減少し、一昨年辺りから作業の主力は若手の
踏高会会員の他にワンゲル等の現役、OBの応援を得て雪下ろしが
行なわれている。





木が大きくなって、この角度ではカタズミ岩の下の雪の斜面は半分しかみえない。



1993/3/2-4

同行： 東北大山の会、塩沢、玉木氏

2月に雪下ろしがしてあったので、2階からは楽に入れたが、1階入り口はすっかり埋まっていた使用出来なかった。

滞在中気温高く、GWのよう。 蘆峰を目指すも、雪は重く、シールにべとつきラッセルが大変で、白樺尾根の途中から退却。

静かな小屋生活を楽しんで帰京。



1980/5/3-7

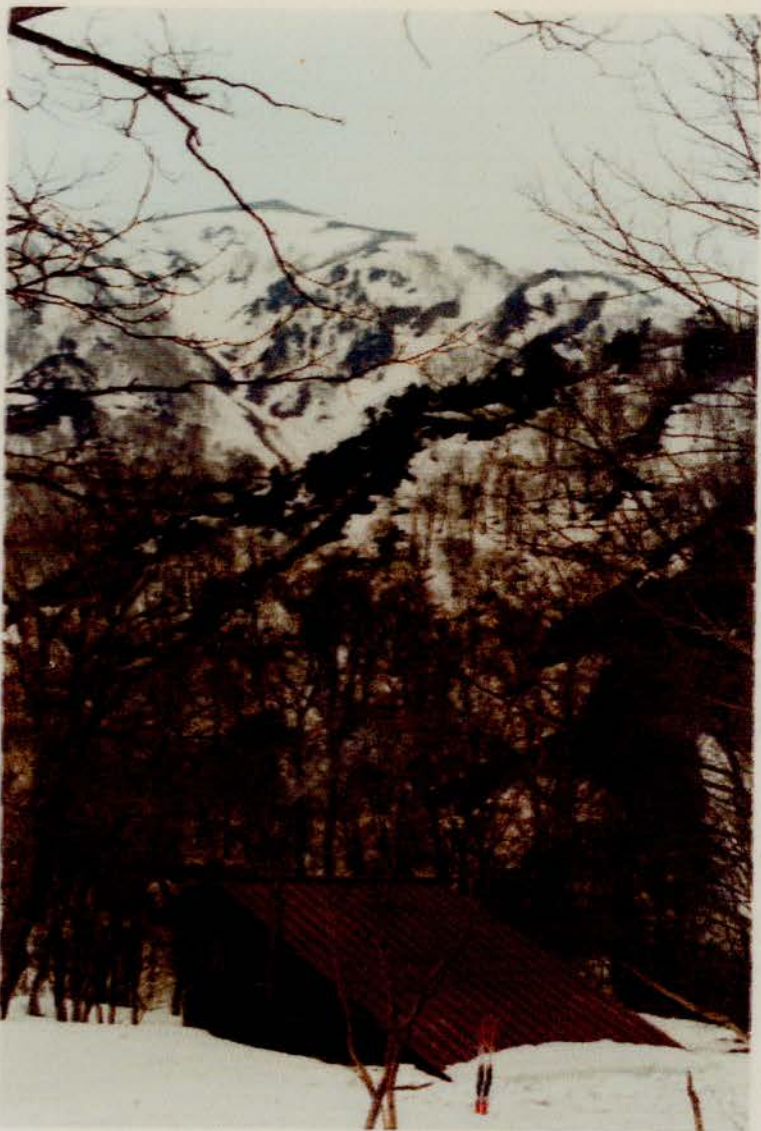
この時は天気に恵まれ、西塚、紫築君と稜線え。そのご清水に移動、巻機山

春 (3月中旬 - 5月)

3月中旬 - 4月上旬、もっとも雪崩の多い時期ではあるが、学生にとっては合宿のしやすいときで戦前から1970頃までは大学、高校の春合宿が行なわれていたが、近ごろはこの時期の入寮者は減少し、同行の志が深せない。一度1992/4/4-6の日本山岳会の山スキー講習会に同行させてもらった。

しかしGWにはほぼ毎年入寮している。

GWの頃の雪の状態は年によって著しくことなる。一般的には、冬の積雪の多少に関係なく、4月の気温に左右されているようだ。4月の気温が低かった年は残雪が多い。



FELO - 84D

1984/4/28-30 (3日間快晴)

同行: 円山、布施

この年は残雪が多く、湯楡曾の街を過ぎると川の中州にまだ雪が残っていた。土合橋の入り口で積雪1m。マチガ沢も湯楡曾川沿いに通れた。

4/29 快晴。 単独で稜線え

寮5:30 - 一の倉山頂12:40-13:10 - 寮15:10



FELO - 84D



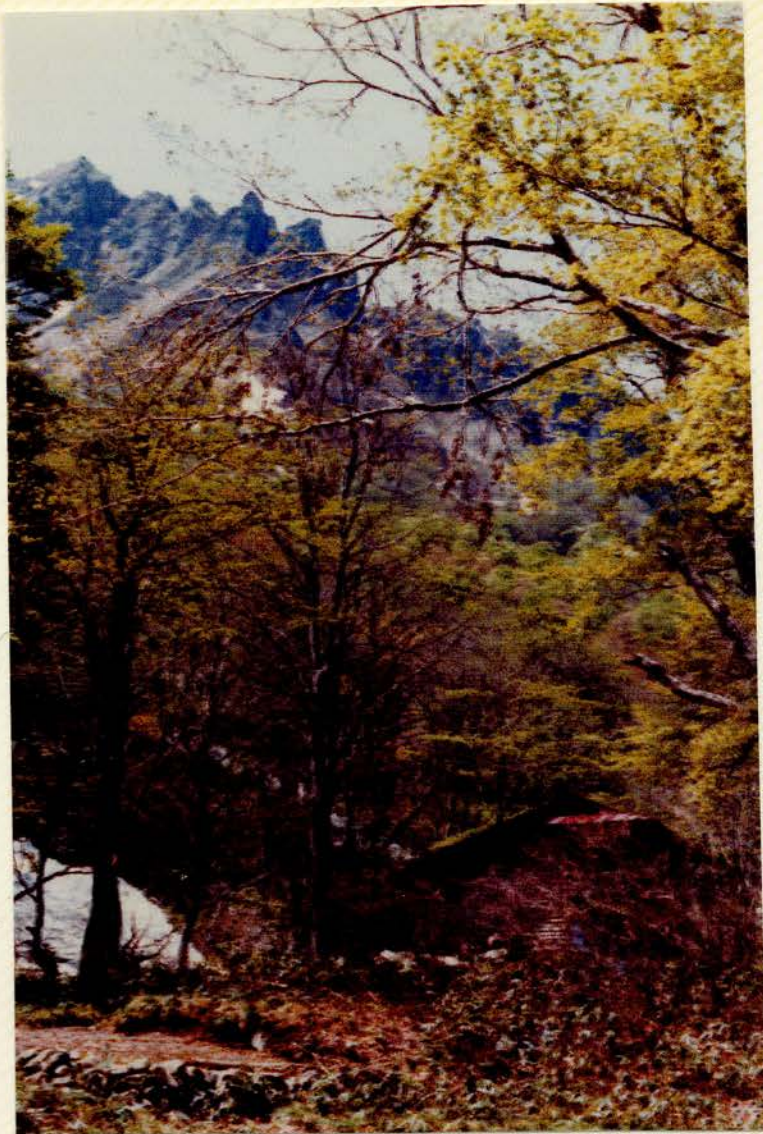
1996/4/27-29 (3日間快晴)

この年も雪が多かった。東京8:17の新幹線で高崎乗り換え。土合橋(11:00)よりスキーを付け途中写真を撮りながら一人で入寮(14:00)。マチガ沢は橋の位置より100m位上流に登り、崖の低い所からキャンプ上に出る。此処から送電線の巡視の道を一の倉沢へ。

28日は朝のうち小雨。晴れて来たので、熊崎夫妻、鈴木と赤倉沢へ。出発が遅かった(10:00)ので、白毛門下の森林帯迄のぼる。



1983/5/3-6 同行 布施



前年も雪は少なかったが、この年はさらに少なかった。
滞在中天気もよく、気温も高く、木々は新芽を吹き出し
はじめ、寮を離れる時は殆ど青葉となった。
地上では菊咲き一輪草が咲いていた。
5/4：二人で稜線え。旧道を芝倉沢出合迄スキーを担ぐ
5/5：武能沢往復。途中の山桜満開。



1982/4/29-5/3 同行 布施
新人雪上訓練の合宿。天候不良で停滞。晴れ間に寮南側の急斜面で確保の訓練と
成蹊スロープでのスキー練習。寮付近は相変わらずテントが沢山張られていた。

1986/5/2-4 TBSの第一回のTV撮影
 一の倉沢からスキーを付ける。 寮付近は少し土が出ていたが
 スキーを引いて成蹊スロープを横切り、テレスを通して芝倉沢え。
 旧道上で撮影。



成蹊スロープ

1986/5/3 撮影風景



1988/12/24 松平氏と
 寮迄ラッセルで苦労したが、寮付近もいやな雪質だった。 鉄塔を目指したが
 直下で退却、成蹊スロープに回る。 在学中の冬合宿の時に比べると雪はすく
 なくなっていたが、スロープは広くなったようだ。



1982/4/29-5/3
 新人雪上訓練であったが、連日天候不良でもっぱらここで
 スキー練習

夏 (6月 - 9月下旬)

梅雨入りを前に寮整備を毎年6月中・下旬に行なっている。主な作業は屋根のペンキ塗り、外壁の防腐剤塗装、WCの汚物処理、室内の清掃、寝具の乾燥備品の点検・補充、燃料の補充、残存調味料の点検・廃棄、薪割り等である。
雪下ろしとこの夏の整備で寮の維持は大変よく、改築してから2002年で24年になるが、以前の寮の25周年の時と比較すると建物の保存状態は遥かに良好である。



1997/6/27-29



JRの小屋からの道の草も綺麗に刈り払われる



1993/6/18-20

JR小屋との間の樹林(芝倉沢側)



1993/6/18-20 TBSが第2回目の撮影をおこなった



1996/6/21-23

今後の課題

トイレの汚物は小川を渡った狭い平地に埋めてい。数年で同じ場所を再び掘り返す事とを繰り返かえして、何時までこのようなことが出来るか疑問である。2001年に一の倉駐車のトイレは太陽熱利用の水洗トイレに改築された。此の場所は南側に崖があり、日照時間は虹芝祭付近と大差ないと思われるので、太陽熱利用の水洗トイレに改築することは不可能ではないだろう。問題は冬期を如何にするかである。冬期に浄化槽を機能させるには電力としては200wあればよいとも聞いているので、風力発電、或いは現在炊事に使用している水による発電など検討の余地があるのではないか、大学の工学部で研究してもらってはと考える。。



1996/6/21-23



天気に恵まれれば屋根で毛布、布団乾燥をする

1996/6/21-23



1996/6/21-23



1995/7/26 - 30 中学山岳部合宿



最近は土合 - マチガ沢間で猿の群れを見かける。この時は寮に小猿をともなった10頭前後の小さな群れが朝10時頃現われた。
カモシカも彼方此方で見かけ、2月には寮と成蹊スロープの間で足跡を見たこともある。まだ熊がでた話は聞いていない。
戦前はカタズミの斜面を横切る親子熊を見た記録(1933/2/18)、子熊を食べた記事(1939/4/1)が小屋日誌に書かれている。

この岩魚は合宿に参加された元教諭大西氏が釣ったもの。彼は毎日数匹釣って来られた。成蹊在学中はマチガ沢の手前の小川(現在は池、傍に避難小屋あり、当時は藪蒼たる樹林であった)が有り、これに切り株が置かれて、これに乗るとよく滑ったものである。此処でときどき岩魚を見かけたので、この小川を岩魚沢と呼んでいた。清水トンネルの工事関係者が発破を仕掛けたので、湯涌曾川水系では岩魚は一匹も見られなかった。



秋 (9月下旬 - 11月)

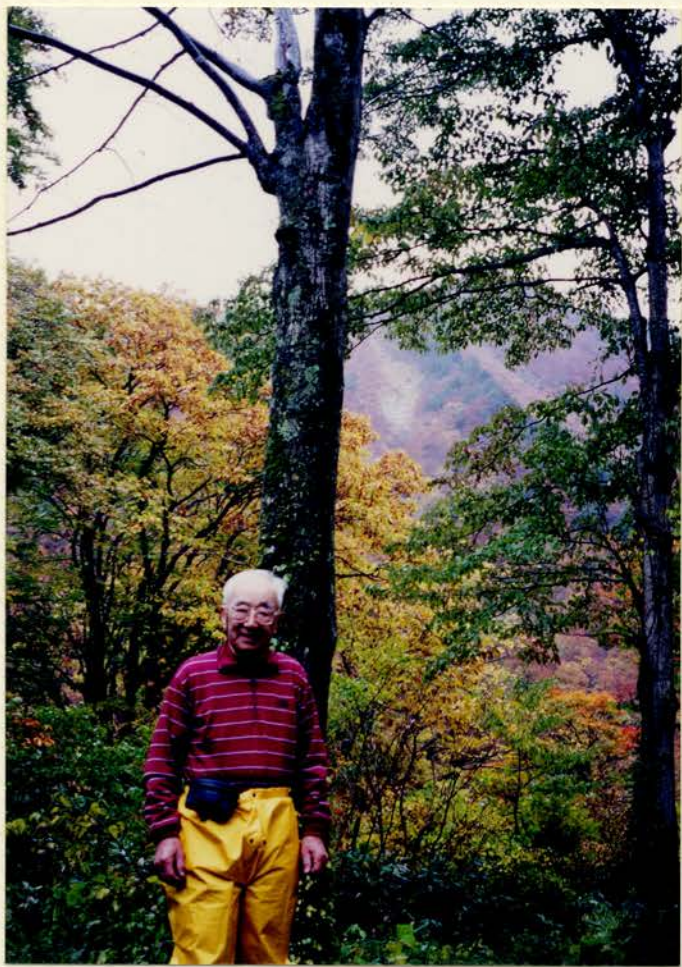
寮付近の紅葉



1985/10/23-25 JRの小屋付近から



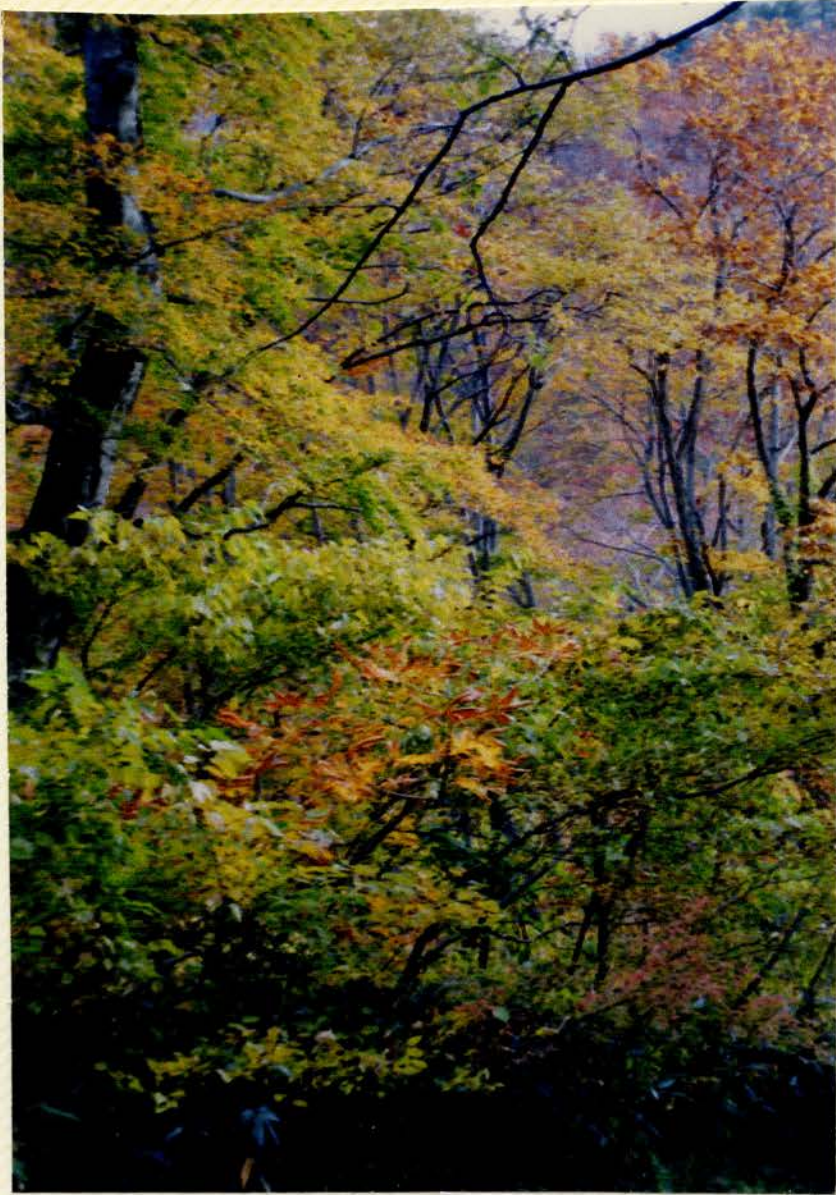
1985/10/11-12
成蹊スロープの上から大倉山



2000/10/28-29
小屋の前で



1996/10/26-27
新雪の大倉山、成蹊スロープ上から

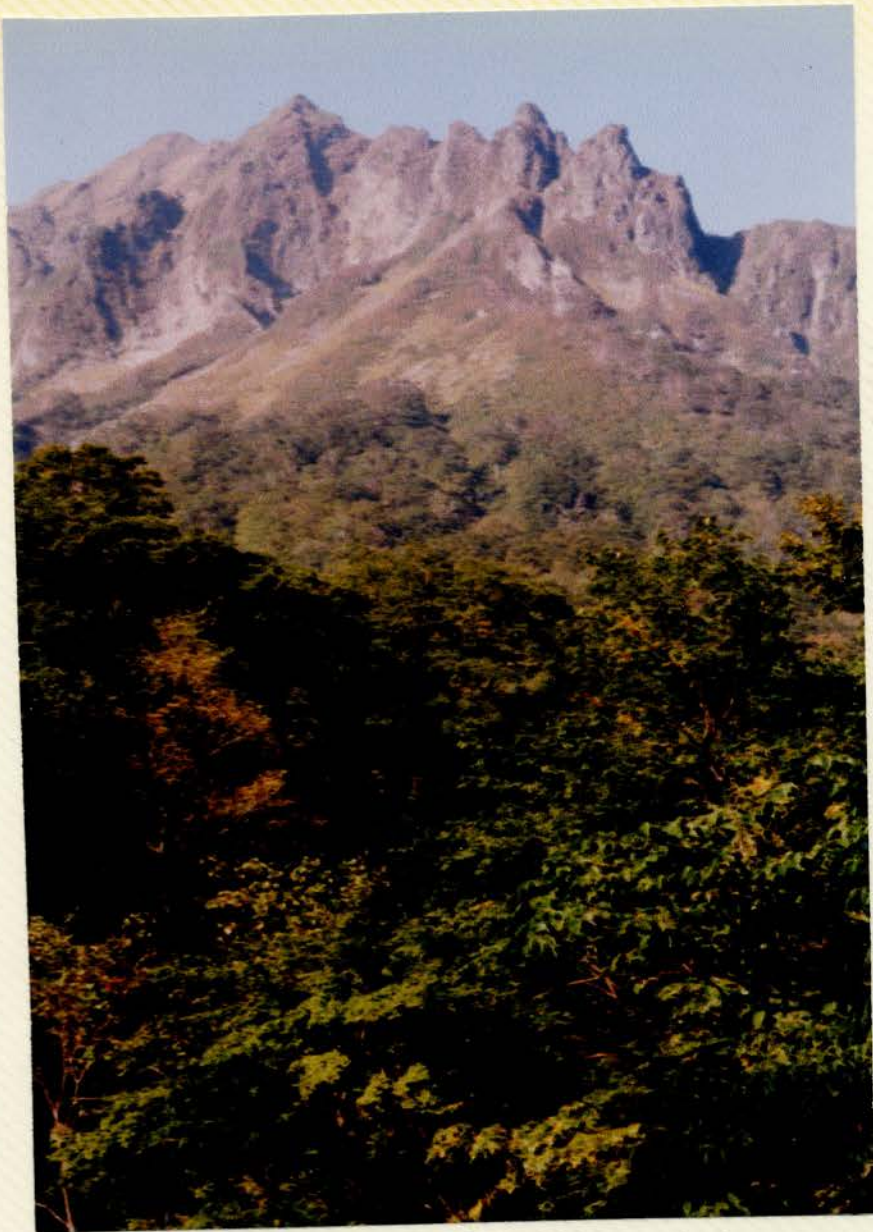


旧道にて、鉄塔に行く途中
1995/10/28-30

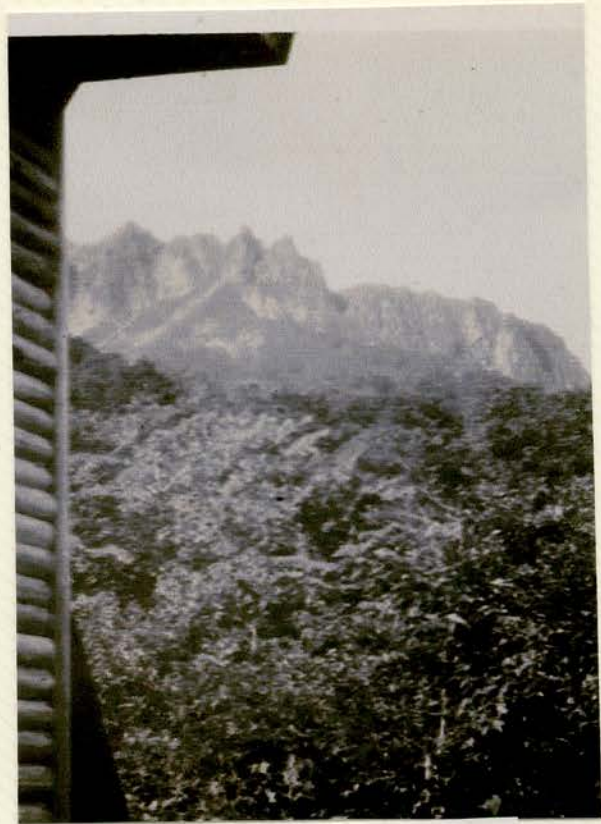
成蹊スロープ
1996/10/26-27



渡辺兵力 一 寮が出来てから64年2人とも足もとが危なっかしくなった 一 三枝守雄



2000/10/28-29 草紅葉



1933/9/23-24 申田孫一氏撮影

カタズミ岩の紅葉



1994/10/9-10

土合 から 蓬峠

土合 — 芝倉沢



現在はコンクリートのホーム。前方がトンネル入り口で、雪除けトンネルのある斜面がかった土合スキー場。1994/2/6-8



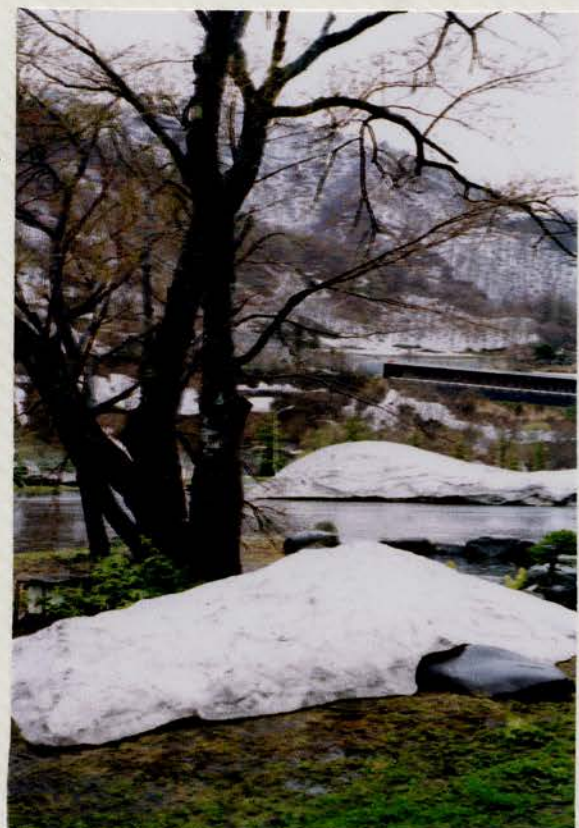
1954年頃、浜田氏提供
前方の白い斜面がゲレンデ

土合駅と山の家

土合駅： 小屋建設当時は上越線は開通しておらず、水上 — 土合間は建設列車に無料で便乗させて貰った。S7/10の薪運びの折りも同様であったが、12月の合宿の時には開通していて、湯沢迄のスキー夜行列車で土合に早朝降りる事が出来た。土合は駅ではなく、信号所(単線運転のため)で、客車・貨車ともに停車し、時には貨物列車の最後尾の車掌室に乗せてもらった事もある。駅にはホームが無かったので乗り降りは大変であった。キップは往には湯輪曾まで購入、帰りは車内で申告するのであるが、検札が無いときは、定期の利用が出来た事もあった。

山の家： 当時の山の家は現在のものより手前にあった(国道から坂を上った付近)。前の家は1945/1/ の雪崩で倒壊(家族が埋まった)し、今の家は現在地に再建されたものである。当時はトンネル建設の飯場であって、宿泊施設は屋根も外壁も黒ペンキ塗りのトタンで作られた長屋で、中央に土間の通路が有り、その両側に板の間があるだけのものであったと記憶する。

土合スキー場： 現在土合橋を渡とすぐに雪除けのトンネルがあるが、これから上の斜面は当時は草地で、ちょっとしたゲレンデであった。列車待ちの時間にここでスキーの練習をしたものである。後に土合スキー場となった。1934年に入ると鉄道省の宣伝もあり、一般のスキー熱は相当なもので猫も杓子も上越方面にやってきて、中には察まで来て土合のゲレンデは何処かと聞く人もいたらしい



山の家からトンネル入り口
1996/5/8-10



旧道の石垣、1981/10/10-11
この写真は一の倉沢-巖ノ沢間のもの

旧国道

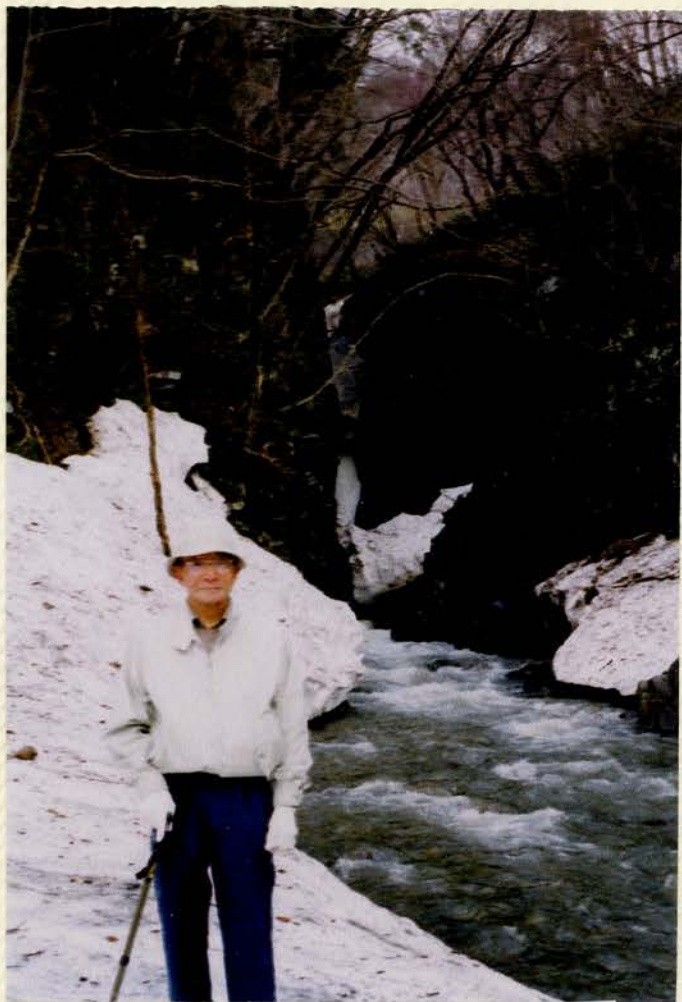
現在旧国道と呼ばれている道路は、明治28年に出来た新道である。蘆峠を越える道は東京-新潟を結ぶ重要な道で昔から使われていた。

寮建設の当時東京から新潟へ汽車で行くには、長野経由で遠回りで、時間はともかく汽車賃が高く、季節労働者は蘆峠越えで往復したらしい。実際に、虹芝寮の敷地の作業を終えて笠岳（現朝日岳）に登るために白樺小屋（高等師範の小屋、現在は無い）に一泊しようとした時に小屋までルンペンらしき人物と一緒に登った。

現在旧道とよばれている道は、東京-新潟を結ぶ重要道路（軍用道路？）として建設され、明治28年完成、開通式には北白川宮が馬車で通り染めをされた。しかし冬期に雪崩で寸断され、実際には役に立たなかった。

芝倉沢から先は送電線の見回り用の細い道となっていて、武能沢に曲がる場所にある鉄塔迄は旧道を歩けるが、これから先は通れない。巡回道路はこの鉄塔から一気に武能沢に下っている。

尚、此の旧国道はひどい藪で、我々の時は全く通行出来なかった。



西黒沢の滝と上田良二（1931理、東大物理、名大名誉教授）
1996/5/9

土合駅から：湯槍曾川に入るには、当時は線路を横切ってまもなく（山の家に入る付近から右岸に渡った（どんな橋であったか記憶がない）ように思う。S17年に出された「虹芝寮」には山の家に入る付近からトロッコ道を伝って云々とあり、現在のマチガ沢駐車場迄の道はその名残か？

土合橋：を渡って西黒沢の橋迄の道筋は昔と変わっていない。同じような距離に滝がみえた。西黒沢を渡ると今の道は緩い登りとなって一時川から離れるが、昔は登る事無く既に湯槍曾川に沿っていた。当時は藪蒼たる林の中の径で、ダムはなかった。

西黒沢の橋：橋が出来たのは昭和30（1955）年頃とゆう（50周年記念出版、第2輯）。1998に上越線の土合-水上を不通とした大雨の増水で、流木等が橋に引っ掛かりダム状となり、あふれた流水で北側の道路が流された。



西黒沢の橋
1986/5/2-4



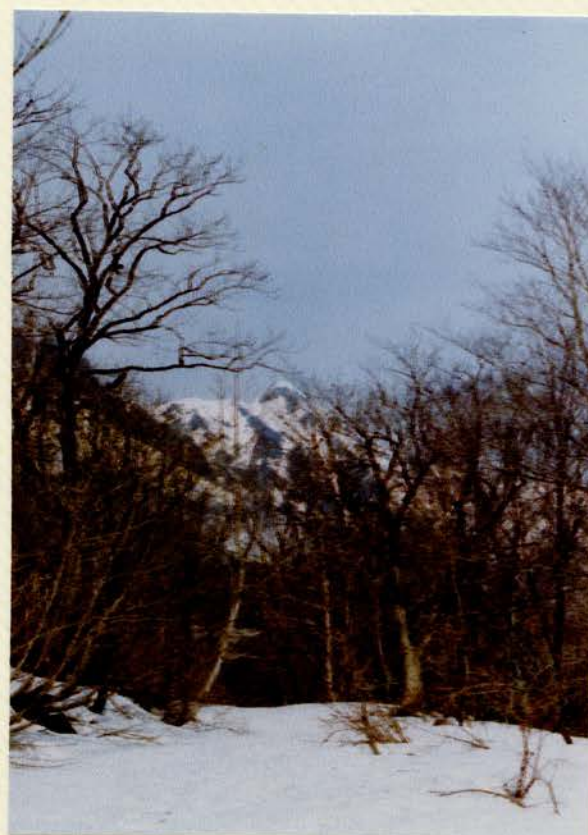
西黒沢の橋をわたって登りに
1987/12/27-29



左と略同じ位置で川べりに下りて
1996/4/27



上の位置よりさらにマチガ沢寄り
1991/12/14



左と略同じ位置より武能岳
1992/4/3



岩魚沢：左の写真の坂を下りて暗渠を渡ると、右手に避難小屋がある。この暗渠の左は小さな池と鉄塔がある。昔は此の付近は森林で、暗渠の所は小さな(1m位)の小沢であった。此の小沢の真ん中に大きな切り株が飛び石の代わりに置いてあり、これに乗るとネイルブーツがよく滑ったので注意しながら渡ったものであった。ここで時々岩魚を見ることがあり、此処を岩魚沢と呼んだ。当時は清水トンネルの工事に従事した作業者が発破をかけて岩魚を捕ったので、湯檜曾川は勿論此処以外の支流でも一匹の岩魚も見事な事はなかった。

この先から下り避難小屋え
1987/12/27



02/ 4/29 もとの岩魚沢にできた池と、鉄塔と武能岳
初夏には此の池に水芭蕉が見られる

マチガ沢駐車場



1995/10/28-30



1986/5/2-4

此処までは以前に伐採が行なわれ、トロッコで運搬されたと思われる。1984/4/28に円山・布施さんと入寮したときここで一休みした。3人で腰を下ろした木は右岸の方に折れていた。また湯檜曾川の下流方向に多数の木が倒されていた。此の年の9/1に熊崎君と成瀬さんのご遺族を寮に案内したときに、トラックが倒木を運びだしていた。これらの倒木は大きな雪崩によるもので、マチガ沢を降ってきた雪崩が湯檜曾川を越えて、さらに下流方向に向きを変えた事を示す。

02/5/1に布施さんと入寮した時、駐車場の北端からマチガ沢までの間は木が全て倒され、マチガ沢は倒木が散乱し、此処をスキーで通るのに苦労した。この時の雪崩も湯檜曾川を乗り越えて、左岸の木を多数倒していた(詳細は雪崩の項参照)。



1987/12/29



車の右上の木の無い所は2000のマチガ沢の雪崩が湯檜曾川を越えて
伸し上がった部分、00/7/1

マチガ沢の橋

湯檜曾川の右岸の沢の扇状地が発達し、本流の流れが次第に右岸の崖を侵蝕した為に、崖上にあった寮建設当時に使用した道(写真のA)は通れなくなった。勿論、当時は橋もなかった。本流の右岸の侵蝕にともなって、マチガ沢の川底も下がった為に渡り難くなって橋が出来たと思われる。橋が出来てからは道はテレスに登り、一の倉沢に向かっていたが、1998年の大水で橋は流され、左岸の斜面も崩れて道もなくなった。道は従来よりは川を少し上流に登りテレスに出るようになった。2000年の雪崩で川は更に荒れ、左岸の崖は更に大きく崩れ、川には雪崩で運ばれた倒木や、大きな石が通行の邪魔をしている。テレスに登る崖には綱が張られている。



流された橋の右岸の橋脚(B)、01/6/16



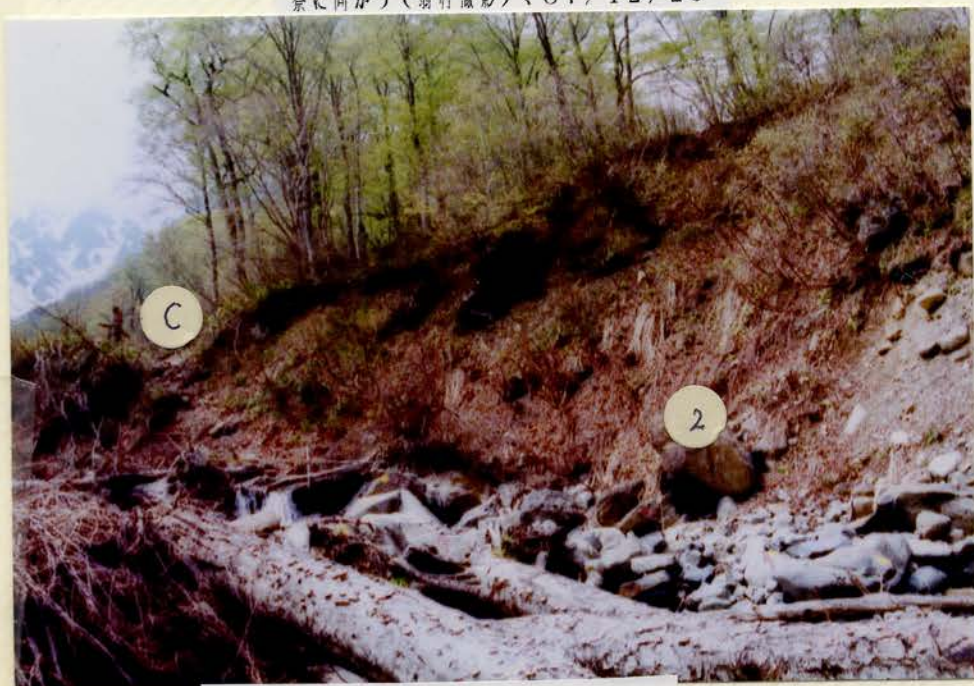
1970/8撮影。一の倉沢への道は橋を渡ってから人物の後ろを崖の方に登り、崖の所から右に曲がり、テレスに登っていた。



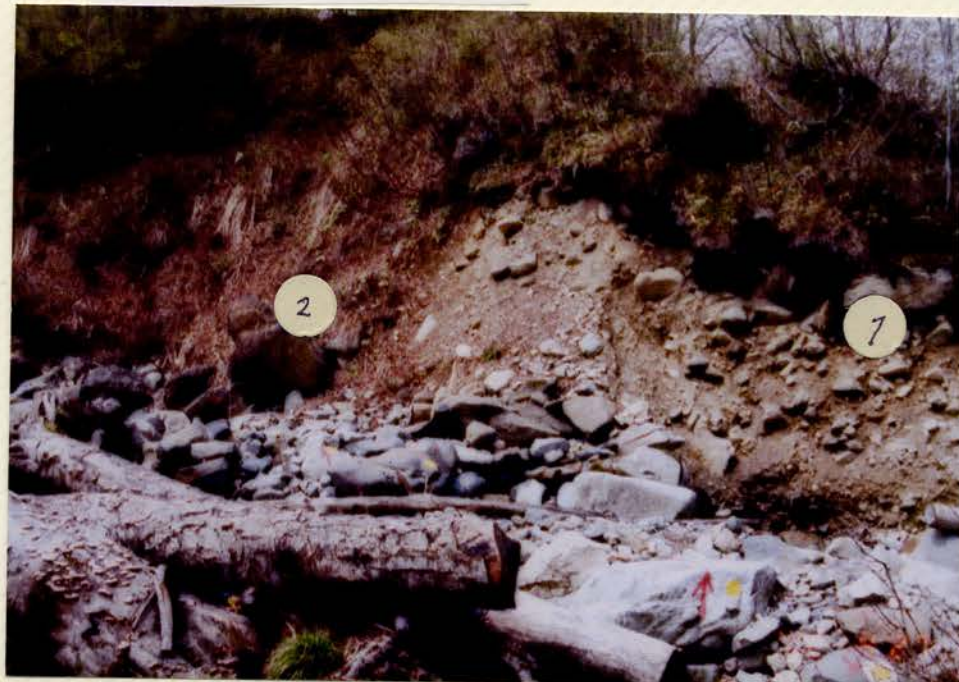
寮に向かう(翁村撮影)、87/12/29



寮建設当時の道の位置(A)、(1)は下の写真の(1)の石と同じ、01/6/16



縄の張ってある(C)2000以降の道、(2)は右の写真の(2)と同じ石



此処を登った道はなくなった

マチガ沢 一の倉沢



マチガ沢キャンプ場のイワウチロの群落。今は乱獲されて消失
1988/5/3



マチガ沢 一の倉沢間の道筋は寮建設当時と比べると、最も変わった所である。建設当時はマチガ沢の川底は抉られてはいなかったもので、略水平に渡って、崖の上を通り林の中を緩やかに一の倉沢に行けた。

現在は一の倉沢自身の扇状地の発達と、対岸のゼニイレ沢の扇状地の発達とで、中間に林を残した二つの水道が出来た。東側が本流で、西側のテレスの下の水道は常時は水は少ない。

マチガ沢からテレスに登り、キャンプ場を過ぎてテレスを下り（此処の降り口、帰りの登り口は、特に積雪期は分かり難い）、概ね西側の流れに添って一の倉沢に向かう。

1995-1997の頃は此の西側の流れの水量が多く、GWの雪解けの時には送電線の巡視路を使用した。

マチガ沢一の倉沢の送電線巡視道
1997/5/1-3



02/4/29

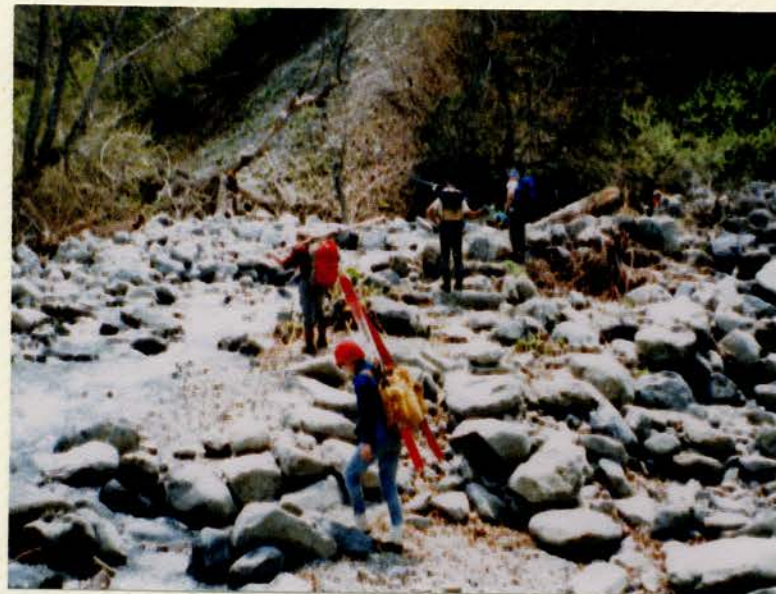
一の倉沢の扇状地

夏路を伝って一の倉沢を渡るとき、寮の建設当時は扇状地にはかなりの木が生えていて、湯檜曾川の流れは見えなかったと記憶する。いまは扇状地が広くなり、かつ植生はなくなり、また対岸のゼニレ沢扇状地とつながって、広い川原となった。

ゼニレ沢の扇状地が発達すると、湯檜曾川は流れを一の倉沢寄りに向きをかえ、右岸の川筋を流れるようになる。その後ゼニレ沢の扇状地は侵蝕されて、あるいは一の倉沢の廃石によって本来の水道に押し戻されて、元に戻り、右岸寄りの川筋は水がなくなる。最近はこの繰り返しが行なわれているらしい。



沢を渡り終えて林に入る所、雪の少ない年で川原の石が出ていた。91/12/14



帰り道、右と略同じ場所から撮影(minox使用)
水のない右岸の川筋をマチガ沢え、98/5/5



扇状地の末端、水流は湯檜曾川の一部
86/5/2, TBS撮影時



一の倉沢と湯檜曾川出合の少し下流
1992/5/1-4



1993/3/2-4

壁 岩 の 倉 一



1981/5/3-5



1998/5/2



旧道からの一の倉、minoxで撮影、91/12/15



98/ 6/26

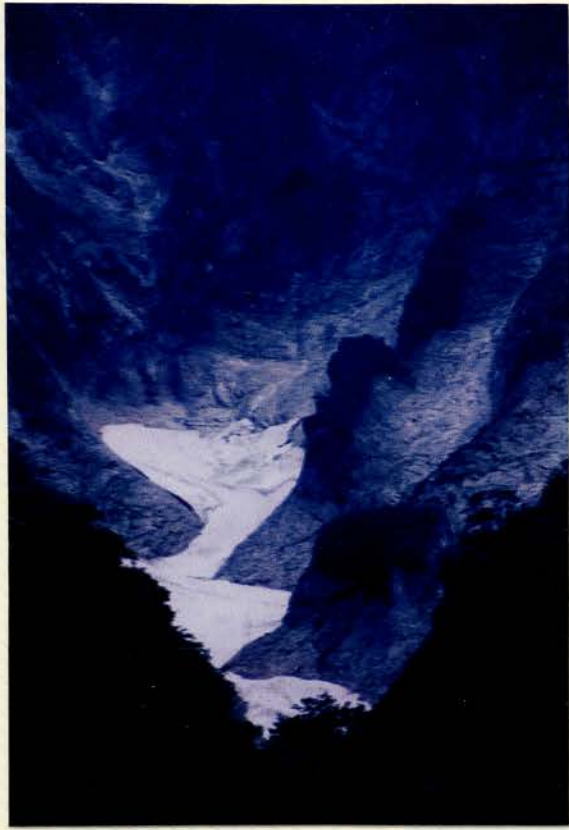


98/10/10

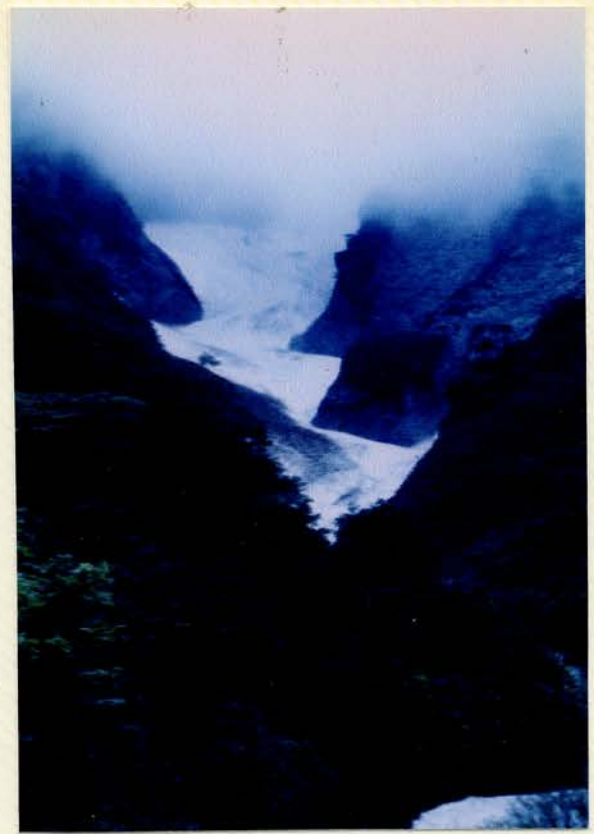


01/ 6/17 駐車場。ここに太陽光利用の水洗WCができた
WCの前から白毛門山

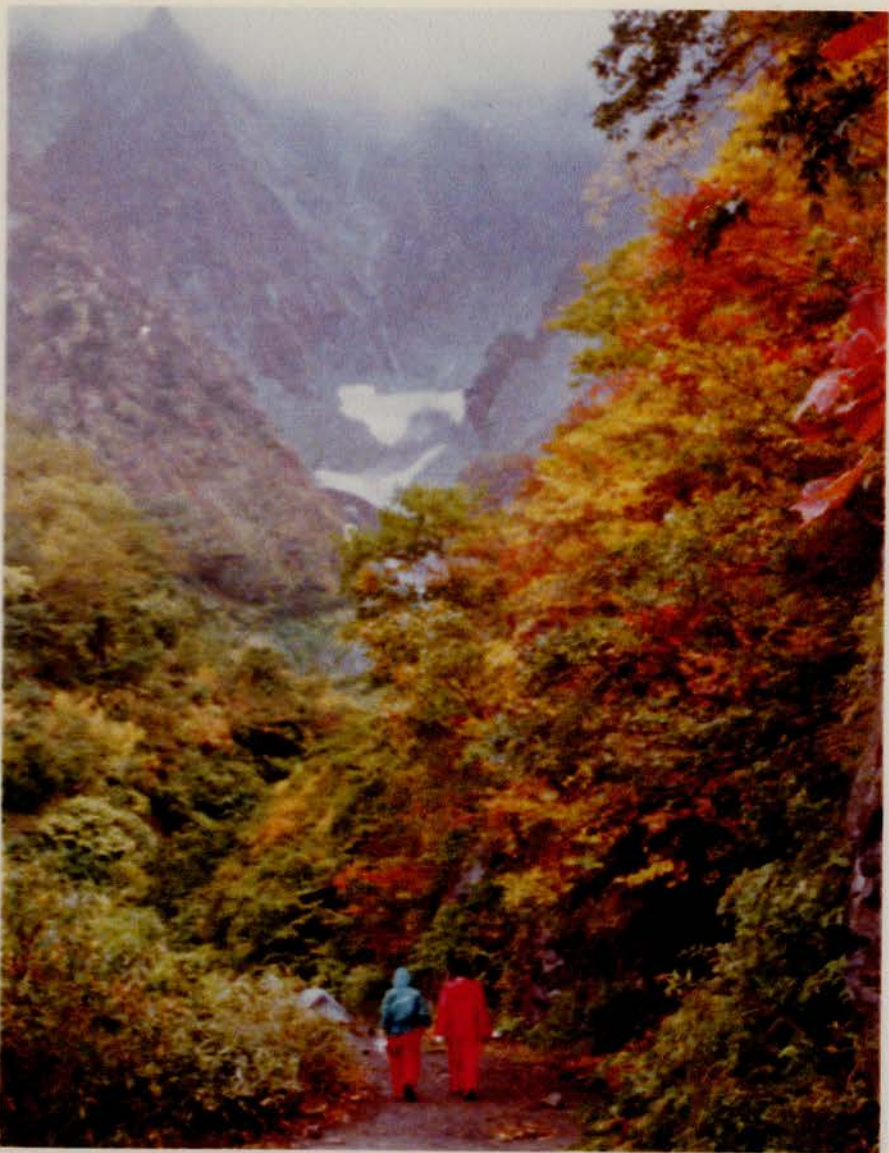
一の倉の雪渓、年により残雪の量がかなり異なる



98/ 6/26



95/6/23



84/10/13



91/10/14

一の倉の墓場と草原



02/ 4/29

一の倉沢を渡って間もなく木々が疎くなって、草地に入る。草地の20~30m手前の左手に明治15/8/19(向かって右)、17年11/7(中央)、同じく11/12(左)にたてられた墓がある。

明治28年に開通した旧国道の建設の為の飯場が此処に置かれて、殉職者の墓か? 或いは此処に小さな集落があったのかも知れない、とゆうのは、此の道は江戸から越後に越す最短の道で、湯檜曾から土合にくる途中テニスコート等がある運動場の終わりの所に関所跡があり、昔から重要な道であった。



02/10/29

此の草原は築建設の頃はもっと広がった。ケルンを中心として南北100m、東西50m位はあった。 当時はケルンのある付近に猟師の草ぶきの小屋があった。 久野、渡辺氏と三人で此処に泊り、芝倉沢や、白樺尾根に登った。この時鬼の上に座って、帰ってきた猟師に怒られた(70周年の記念の会合のおり、久野(現、長富)さんが話されたのは此処の事である)。

1932/3/18 一の倉沢え、雪夕方晴

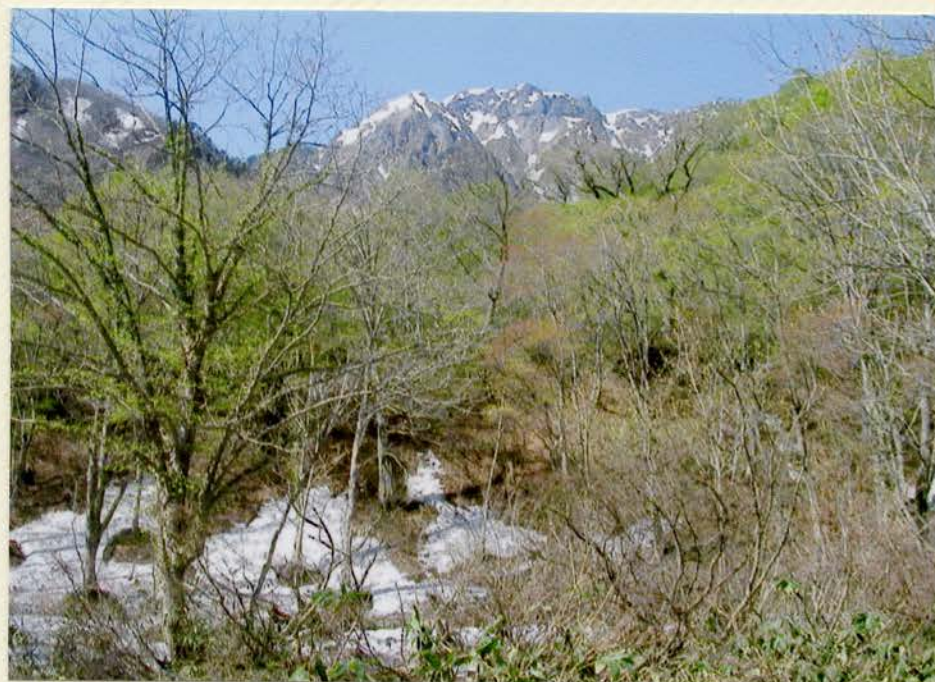
土合6:15 - 一の倉沢出合7:05-7:20 - 一の沢ski depot
8:30-9:30 - 沢を登る - 尾根下50m 11:00 - ski
depot 11:30、スキー練習、15:30 - 土合山の家16:00

3/19 芝倉沢え

土合7:20 - 一の倉猟師小屋8:00-8:30 - 芝倉沢入り口9:00
-9:10 - 旧道上三つ目の沢出合10:00-10:20 - 地図上の岩壁
の終点11:55、rucksack depot, 12:30) - 茂倉岳
13:35 - rucksack depot 14:30-15:00 -
一の倉小屋16:30

3/20 吹雪

午前中白樺尾根に遊びに行く。 15:30小屋を出て、17:57の汽車で帰京
(記録2号より)



02/ 4/29



02/4/29

幽の沢手前の倒木地帯



94/10/9



2000/5/1

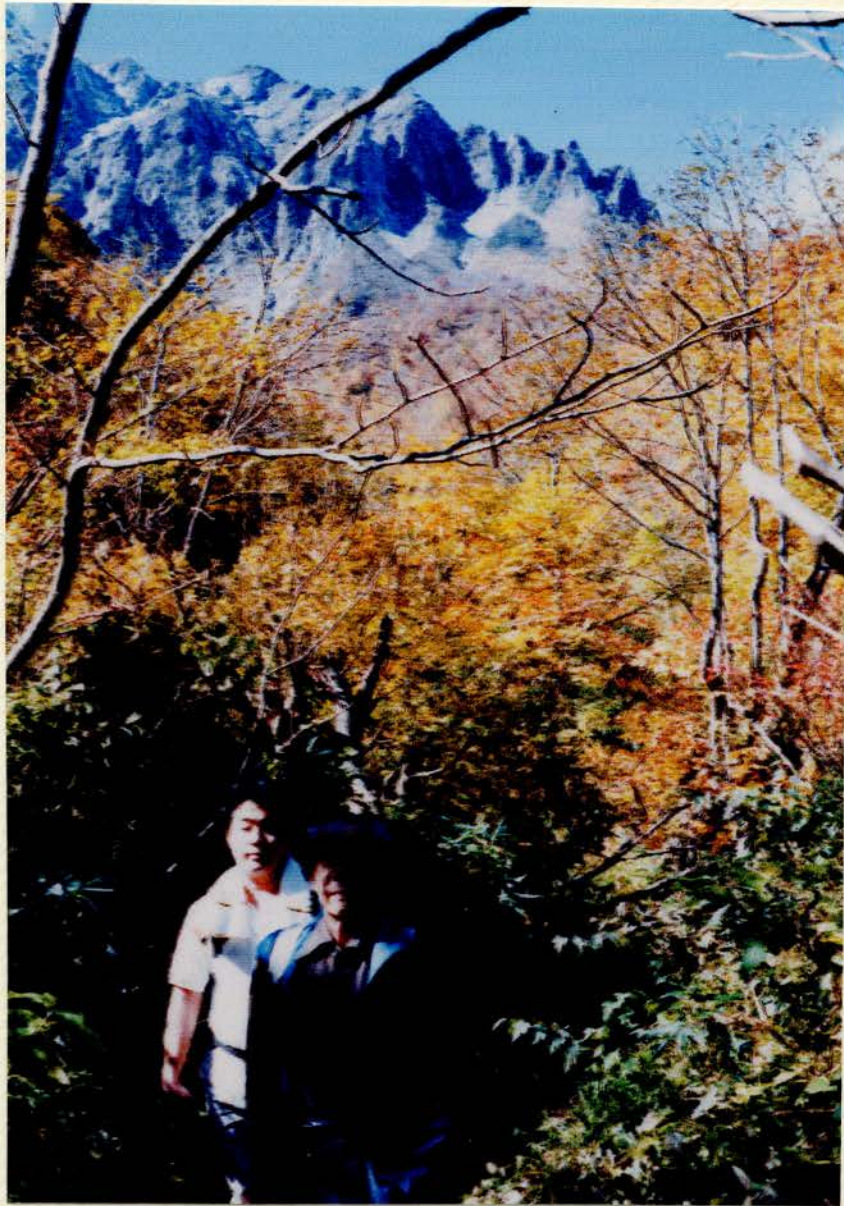


2000/5/1



幽の沢を渡る、89/12/27

いつごろであったかはっきり記憶していないが(1994?)、幽の沢出合の少し手前に倒木地帯が出来た。此の倒木の原因は雪崩説と風による説とがあるが、倒された方向がまちまちで、また地形的にも雪崩が来る所とは考え難いので、おそらく風によるものではなかろうか?

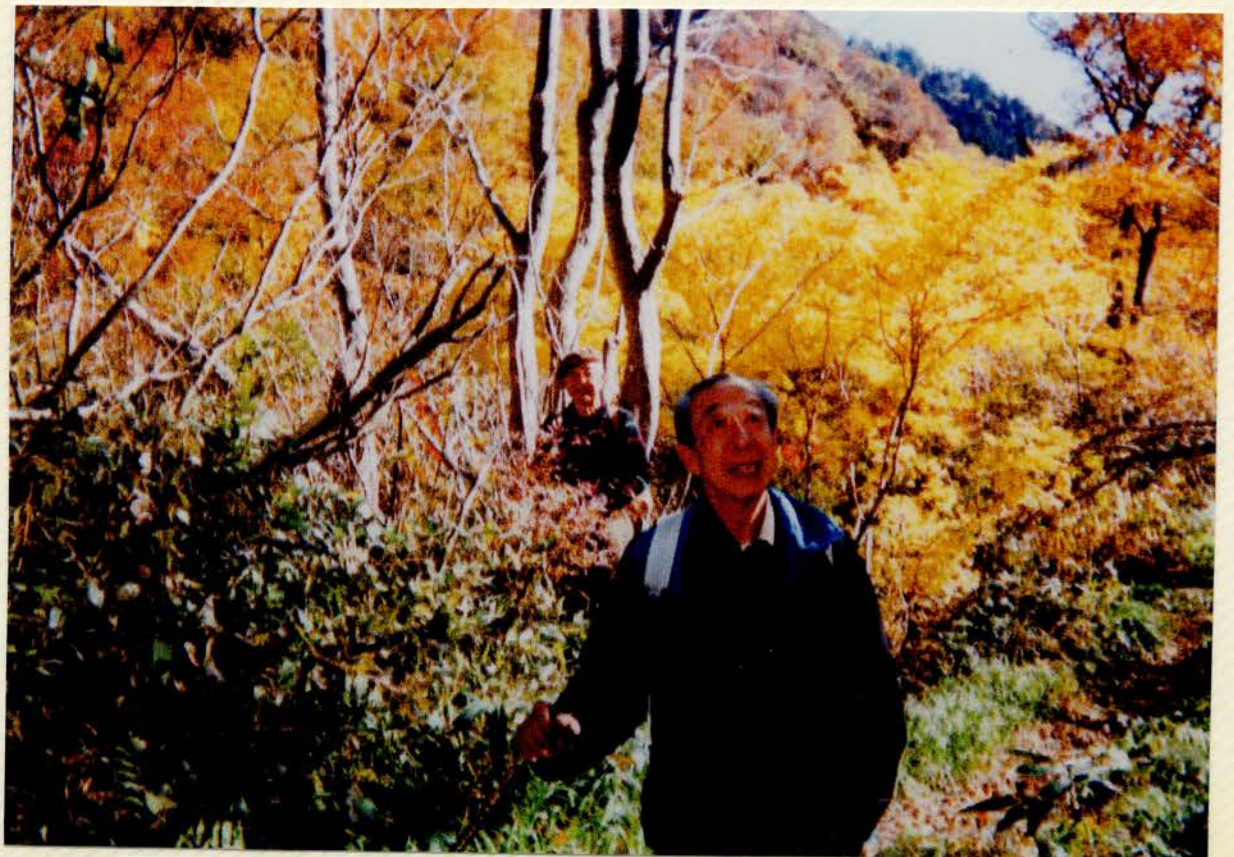


96/10/27

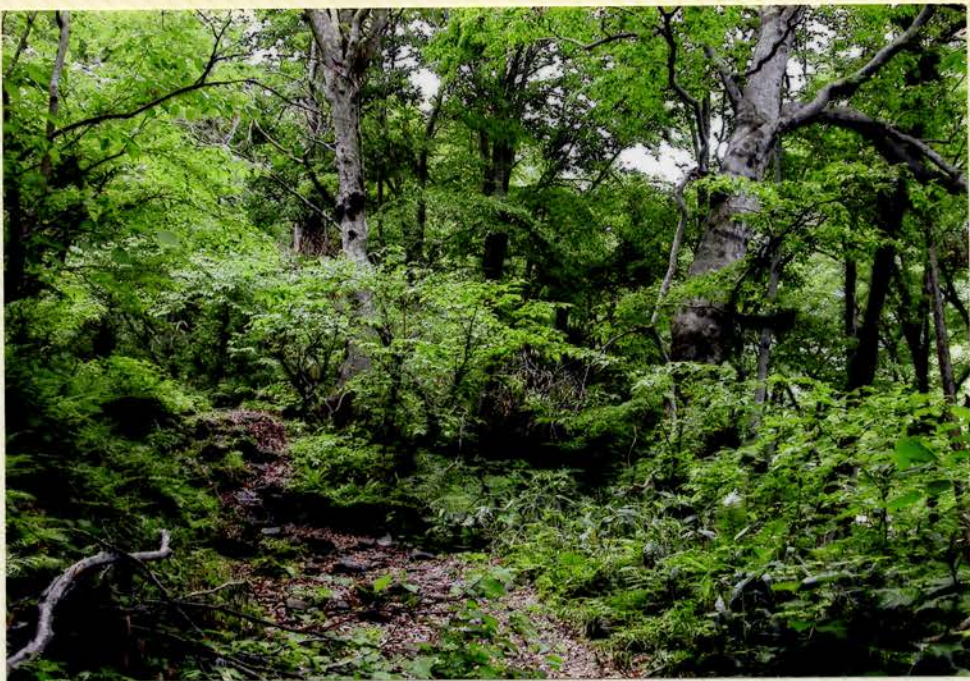


88/10/29

幽ノ沢を渡って、寮への登りにかかるまでは、道幅が広くなっただけで一番昔の面影を残している。



96/10/27



左：現在の道、03/6/14

寮建設以前の道

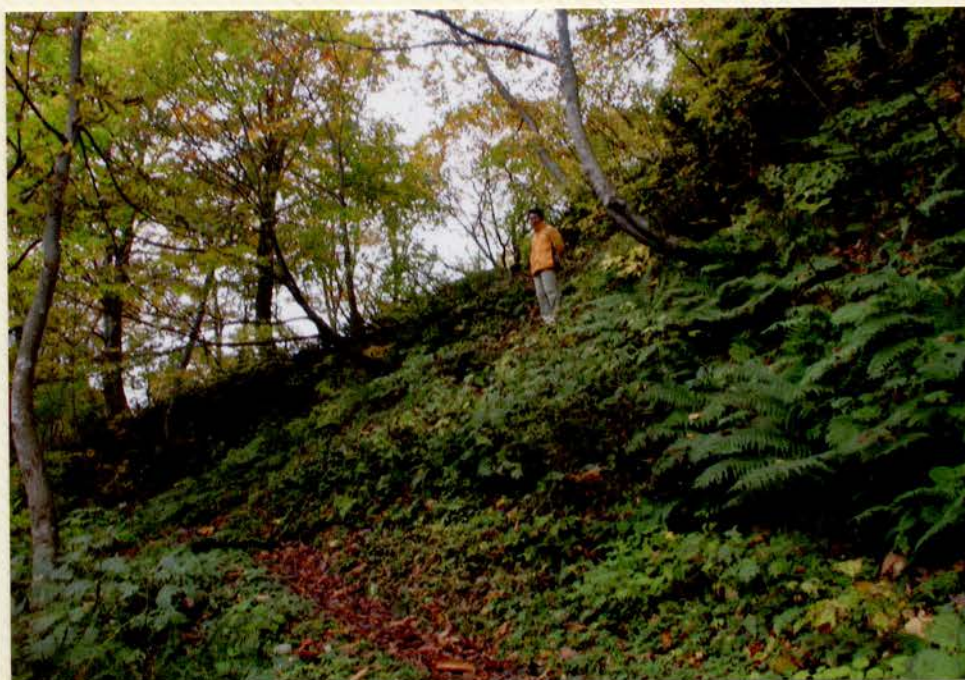
鷹の沢から $2/3$ 位の所から道はテラスに登る。寮建設当時の道はこれを登らずに路平らに進んで芝倉沢に入っていた。現在の道筋の大方は、建築材料運搬の為に我々が作ったものである。蘆侍越えや清水峠越えは関東から新潟地方に出る最短の道で、浮浪者の往来があり、先に建設された武能沢を渡った所にあった高等師範の白樺小屋は浮浪者の為に踏く荒らされた経緯があり、日本山岳会の先輩たちから注意があったので(このことは山岳会の会報にも明記されている)、人目につきにくいように寮建設後この道を塞ぎ、入寮には従来の道を使用した。国鉄の送電線見張り小屋の建設で復活し、以前の道は使われていない。



不思議な構造物。建設当時の道にはこのようなものは無かった。以前から存在し、我々の作った道筋が違ったのか？古いものではなさそうで、国鉄の人々によって作られたのか。入り口は30-40cm位、深さ1m強、炭焼き窯とも異なり、これはなんだろう。03/6/14

芝倉沢から寮のあるテラスに登る道

前にも書いたように芝倉沢の川原にテントを張って、まずこの道を開削した。02/10/27



旧 国 道

一の倉沢から先は舗装されず、ぬかるみが沢山あった道であったが、01/6/16に通った時には細かい採石が敷かれて歩きよくなっていた。此の道は芝倉沢の少し手前迄は車が入るが、その先は送電線の巡視道で、草や木が茂って怪となり、武能沢右岸の鉄塔までつづく。此処から先はこの国道は通れない。ここから武能沢まで猛烈に急な下り怪となり、武能沢を渡って、蘆侍えの道に合流する。



寮の上、芝倉沢右岸；85/10/24

麿の沢左俣の滝

1933/12/29渡辺、高木両君は一の倉奥壁を登り、一の倉岳より芝倉沢を降って寮に帰る所を猛吹雪のため進路を誤り、カタズミ尾根を少し降って麿の沢左俣本流を下降し、ジバーク中、夜半雪崩に襲われて、沢のしたに飛ばされたのが此の滝である。幸い両者共に致命的な故障もなく、名も知れぬ沢を下り、本流との出合で湯槍曾川の谷であることを知り、無事帰寮した（記録3号）



寮に降る別れ道付近、85/10/12；
武能沢まで散歩



寮の反対側、芝倉沢左岸、85/10/24

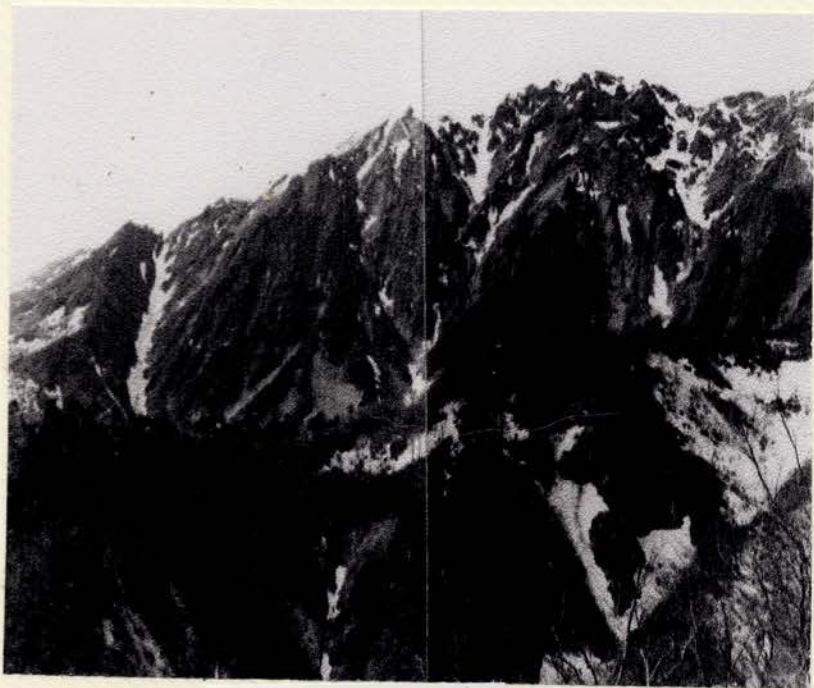
鉄塔よりの眺め



カタズミ岩、 88/5/1



清水峠方面、 93/5/3



一の會沢、 88/5/1



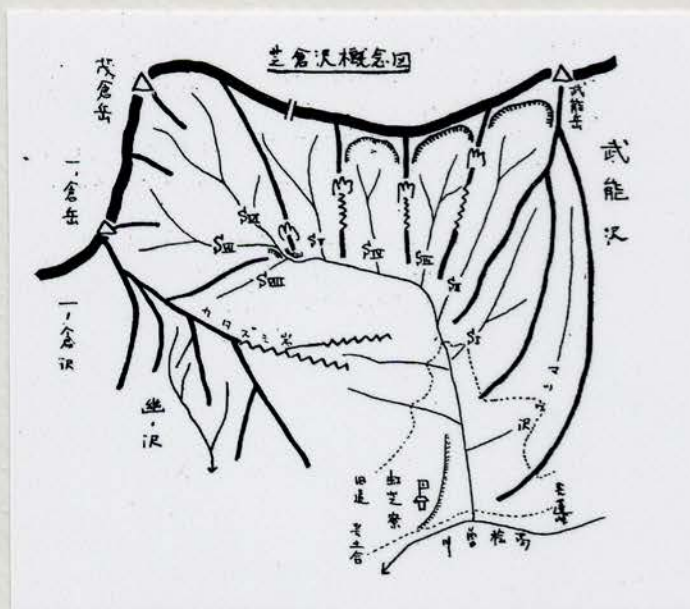
95/10/30

芝倉沢



春の芝倉沢

長島辰郎



記録2号よりコピー

此の写真は虹芝寮建築の翌年(1933)の春合宿の3/18に渡辺、長高、立見、中屋の4名がS Iから武能岳に直登し茂倉岳に至り、芝倉沢を下降したときのものである。この時は武能直下より頂上まではアイゼンを使用しその他はスキーを使用。最近はこのような行動は皆無に等しく、L字屈曲から縦線迄を入れた芝倉沢の写真は得難く、貴重なものである。

芝倉沢入り口

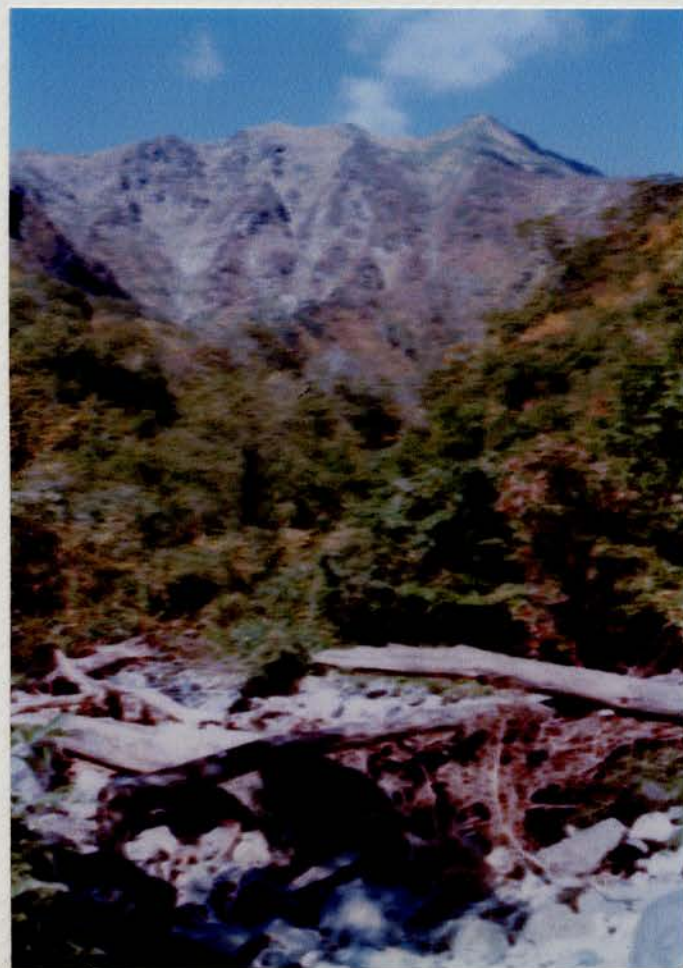


36/ 7/19, 家族と



02/10/26, 70年祭

寮建設時には土合からの道と湯輪曾川との間の川原は十分に広く、作業に従事した高校1年生と中学生を含む部員合計21名がテントを張ることが出来た。この時は木も少なかった。最近(1948に来たときは以前と同じようであったと記憶している)は川筋が2本となり、寮のあるテラス寄りの方は常時水は流れていない。本流との間には草と木が茂っている。本流自体は昔より河幅が広くなり、かつ以前は岸の高さがせいぜい50cm位であったが、現在は写真のように岸の高さが2m以上となって、川床が下がった事を示している。



81/10/11, 10月中旬は紅葉にはちよっと早い



95/ 7/27 (中学合宿)、雪の多い年でS_mS_vに残雪



96/10/27, 10月下旬が紅葉の見頃



83/ 5/ 5, 雪の少ない年のGW
此れ程新緑の早いのは珍しい



01/ 5/ 3, 成蹊スロープ下



芝倉沢最奥の野营地、93/ 5/ 1

虹芝寮から芝倉沢に入るときに、雪の多い年の春に成蹊スロープの下部を横切って、利用するテレスの最上部にある。この時は現役が野営中。

この日は曇天で風があった。福田君と彼の友人と後線をめざして登ったが、L字を登りきった頃から風はますます強くなり、引き返した。しかし、野营地までおると風当たりは殆ど感じなかった。

要注意!

このようによい野营地であるが、豪雪の厳冬期にはマツウ沢の雪崩が芝倉沢を乗り越えて、テレスの上を下降するらしい。84/4/28に此处を通過した時、テレスの木が下流むきに雪の中に押し込められていた、



84/ 4/28, マツウ沢手前
此の年は雪多く、湯着曹川の中州にも残雪があった



84/4/28, マツウ沢の雪崩

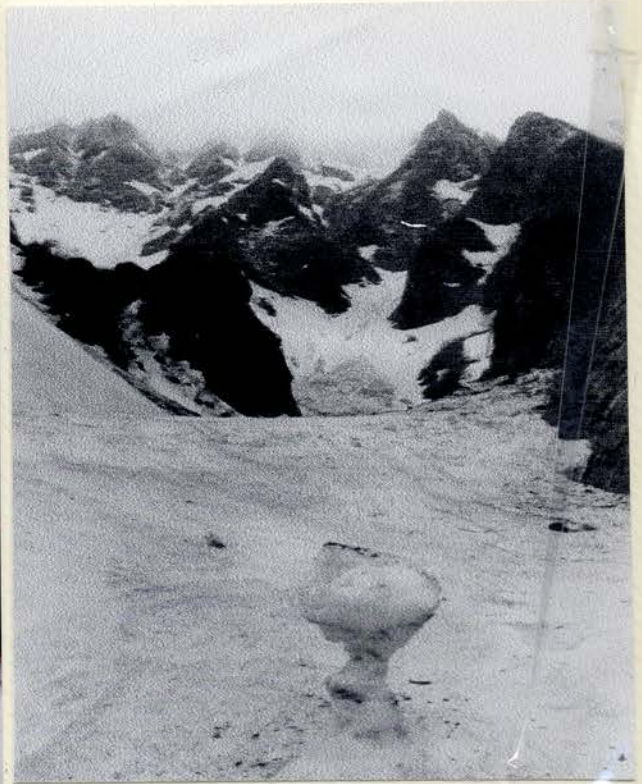
旧国道との出合



此のコンクリートの暗渠は戦後に作られた
85/10/12, 紅葉には早い



手前のデブリはカタズミ岩から、この雪崩はGWでも出る
94/4/30



傾斜の変わる所が旧道、年により此処に小さな クレパスができる
93/ 5/ 1



96/ 5/ 3、 奥利根の山々

L字屈曲の上部



02/ 4/28、 大倉山
この年は雪少なくスキー携行せず

戦前はこのようなスキーを引いて登った



80/ 5/ 4, 皮靴着用



89/ 5/ 3, Minox使用



81/ 5/ 4, 記念撮影、スキー山岳部の人たちと
この時は西塚君と二人で後線に登った



89/ 5/ 3, Minox使用
井草さんと後線え

し字 - S字屈曲
年によってデブリの大きさ、汚れの度合いがことなる



94/ 4/30



02/ 4/28



84/ 5/ 3



雪上訓練の一瞬、林、高橋さん
86/ 5/ 3。Minoxで撮影



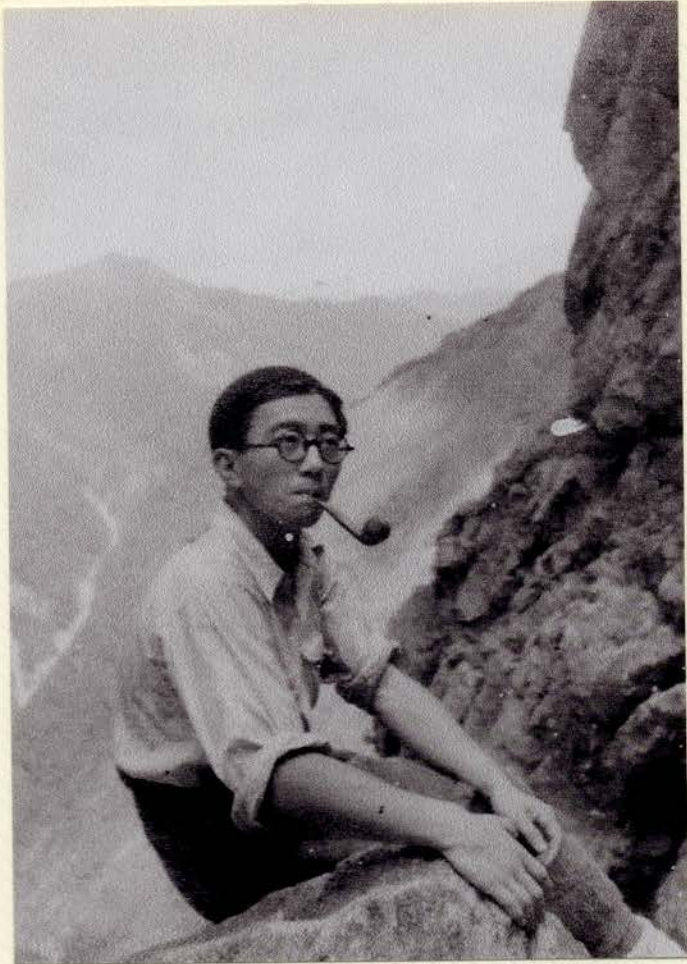
S字の下部、中央西口さん
86/ 5/ 3。Minoxで撮影



89/ 5/ 4, S字下の大岩



S字を登って、カールボテンの下部より清水峠、奥利根の山々
80/ 5/ 4



S_v上部にて、今村陸郎君と武能岳一連峰へ
1936/ 7/19-23



カールポーンを降る, 81/ 5/ 4
この時もまだ皮靴着用

一の倉 - 茂倉稜線

稜線登頂記録

年月日	同行者
1932/3/19	久野、渡辺
80/5/ 4	西塚、紫築
81/5/ 4	西塚
83/5/ 4	布施
84/4/29	単独
88/5/ 2	井草
89/5/ 3	井草
5/ 4	井草、高橋、福田他
94/5/ 3	円山、梅田 ^{現子} 、西口他

(80才、最後の登頂となる?)



89/ 5/ 4



西塚、紫筑



此のお嬢さんは寮のゴム長で登ってきた
89/ 5/ 4



80/ 5/ 4



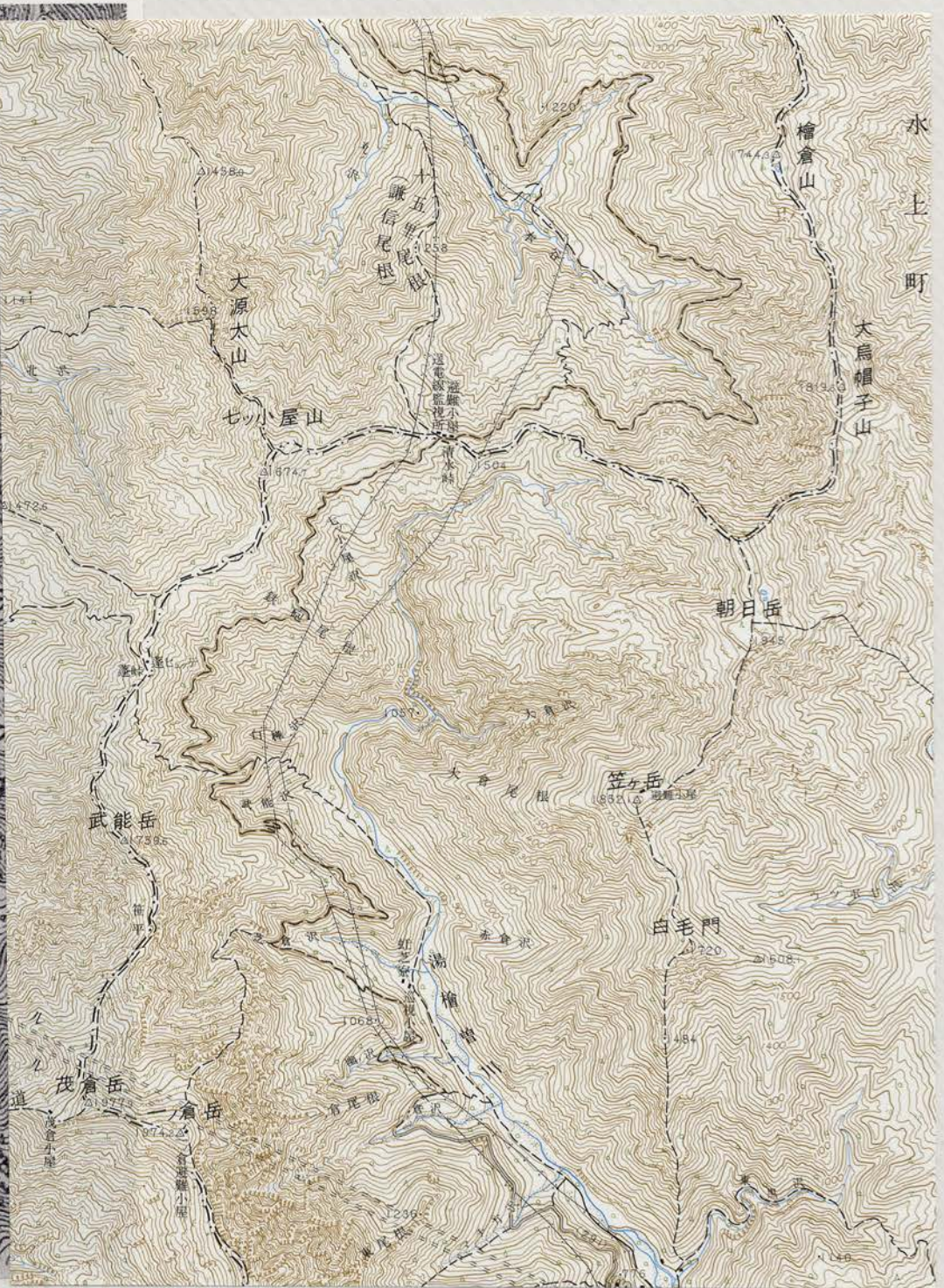
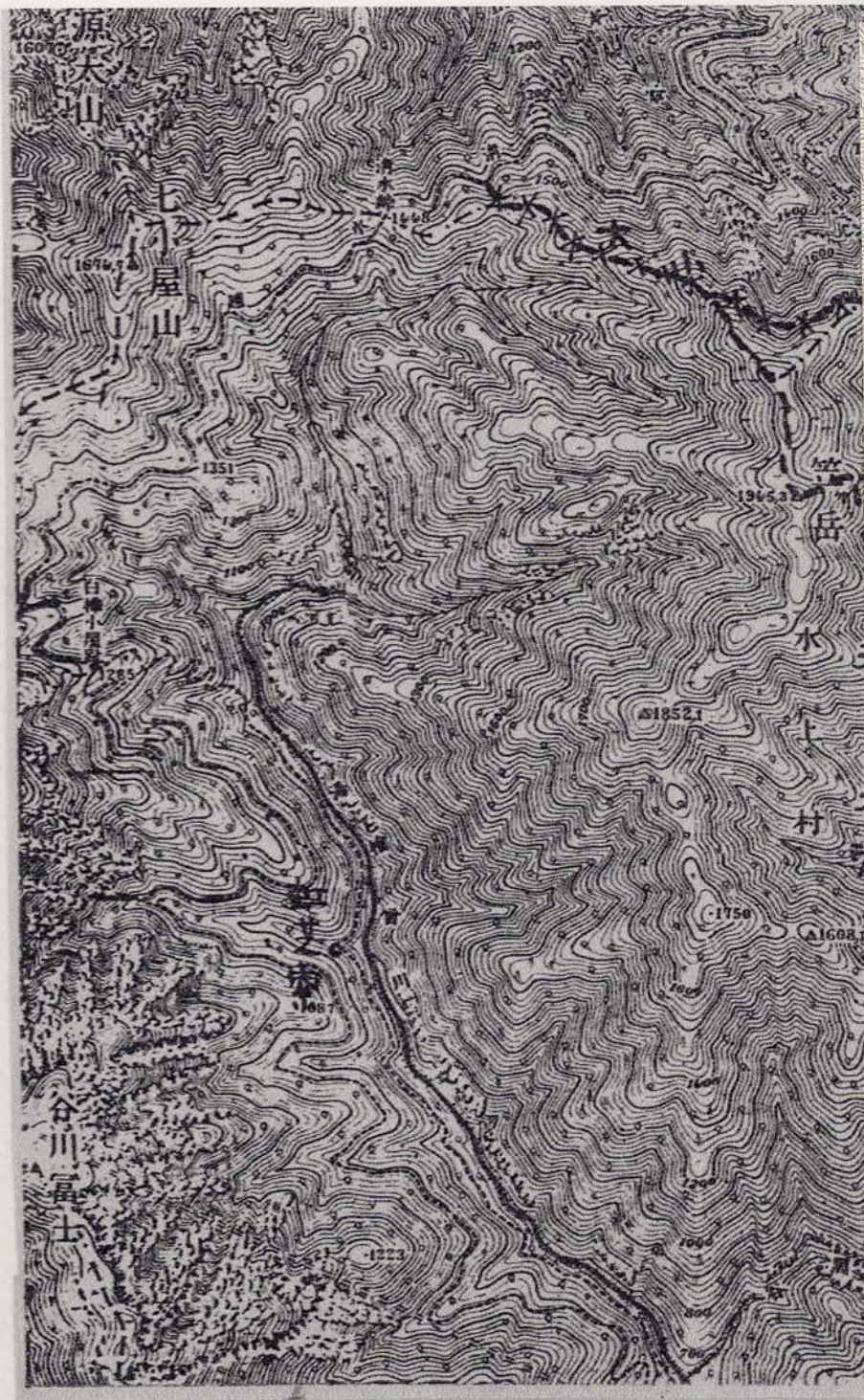
奥利根の山々、条件がよければ此処から富士山も見える
80/ 5/ 4

芝倉沢 — 蓬峠

道筋は変わっていない。赤倉沢の先で広いガレ場となっている箇所は、以前は林の中の急斜面でよく表層雪崩がでた斜面かと思う。武能沢を渉る所は昔と同じようだが、涉ってから1940/1に倒壊した国鉄の小屋や、旧高等師範の白樺小屋は何処だかわからなくなっている。

七曲がりの上部、鉄塔に近づくとも木が大きくなって、道にかぶさって雪の少なかった1987年暮れには苦勞した。尾根にある避難小屋は、当時ブリキ小屋と呼ばれたちやちなものであった。此処から蓬峠への道は少し広くなっただけで、昔と同じようだ。峠の小屋はいつ出来たのかわからないが、その付近の草原は荒れて、草が少なくなり湿地になっている。

山の名称の変更： 1936/7に武能沢出合から大倉山(1852.1m)に登った一行が笠ヶ岳と記された指導標を発見。此の項より我々が笠ヶ岳と呼んだ1945.3mのピークは朝日岳、此の北の朝日岳、1819.6m、は大烏帽子山となった。しかし現在の地図の笠ヶ岳は今も我々は大倉山と呼んでいる。また古い地図では一の倉岳のところに谷川富士と記されている。



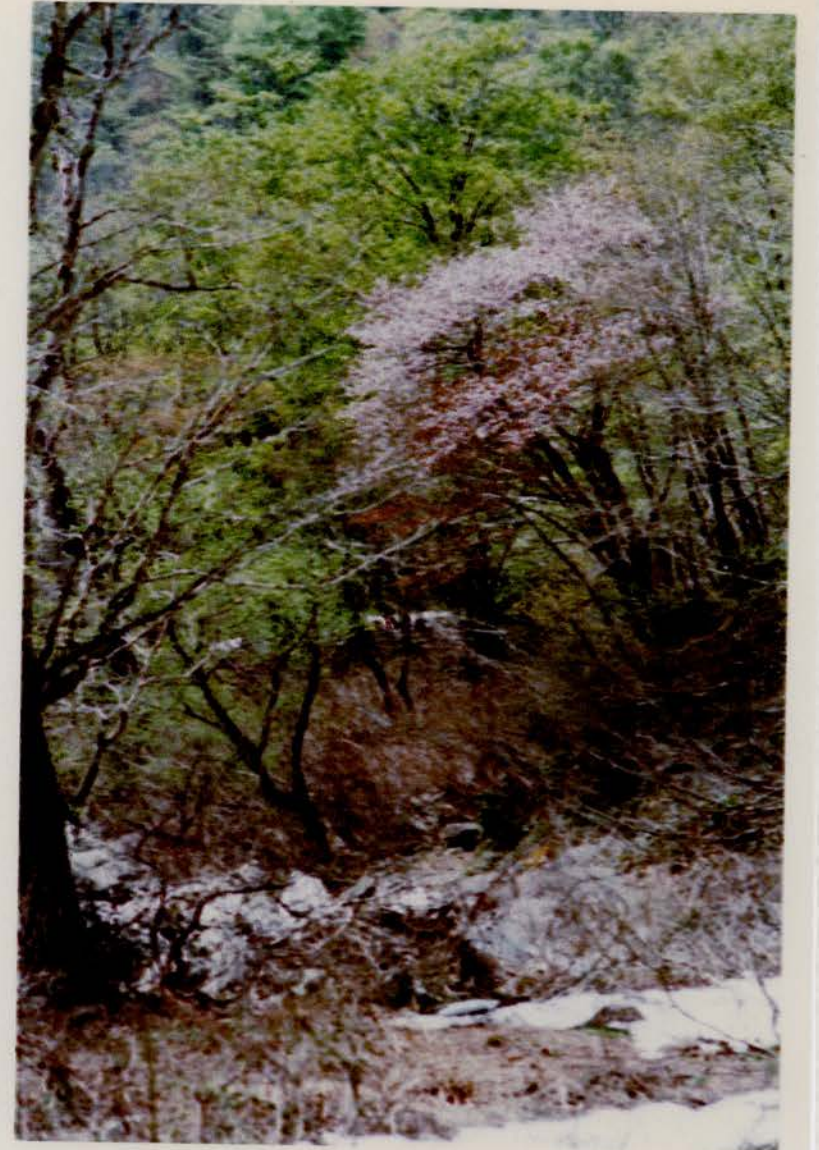
記録2号掲載の久野修吉氏の行動したコースを示した付図の一部のコピー
 XX 1931/12のコースで、同氏の行動力には敬意を表する。

芝倉沢 - 赤倉沢の山桜

1983のGWに布施さんと二人で入寮。雪は少ない年で寮付近は殆ど雪がなく、すでに新緑が始まっていた。5/4は後線に登ったが、意外と旧道から上の残雪は例年と大差無かった。5/5は快晴で武能沢まで散歩したが、途中赤倉沢出合の下で、残雪の上に満開の山桜を見た。



83/ 5/ 4



FILE - 83D



マユミの赤い実が美しい、赤倉沢の対岸付近
02/10/26



赤倉沢 - 武能沢

戦前は芝倉沢を渡り林を抜けて、一環川岸に出てからは武能沢まで林の中のトラバースで船ど左岸を見ることは無く、また、湯槍曾川を通行した時に左岸のガレ場や中州等は無かったと記憶する。

正面の谷が赤倉沢、 02/10/26



湯槍曾川の中州と、左岸の二つのガレ場、 2/10/26

右岸のガレ場

1983/5/4に布施さんとこのガレ場を山菜を取りに下りたが、この時はガレは中州と繋がっていた。その後川筋が変わって、ガレ場の下部を洗い流し、中州が出来たらしい。そして、ガレ場は急峻となり危険で、今回は網が張ってあった。戦前は急峻な林のなかの斜面で、冬期に浅い小さな表層雪崩がでた所と思う。

02/10/26





赤倉沢を登る、同行：熊崎夫妻、鈴木直樹
96/ 4/28

朝雨が降っていたが、9時頃から晴れてきたので、急遽赤倉沢に入ることにした。
時間切れで、右俣と白毛門-大倉の稜との殿中間の林地帯から引き返したが、
楽しい一日であった

二俣から一の倉岳、正面は鷹の沢



同所より芝倉沢、旧道が見える



二俣から林地帯に向け急斜面を登る。熊崎君がスキーをもってくれた。
帰りは2年ぶり(94年GW以来)に急斜面の滑降を楽しんだ。



二俣での休憩



赤倉沢をすぎて、武能岳を望む。 96/ 3/ 3
赤倉沢の出合を過ぎると傾斜が急に強くなる。 前の写真に示したガレ場からのデブリによるのか？
此処からの武能岳は美しい。 同行： 塩沢、玉木（東北大、山の会）



急傾斜の所を登と再び緩くなる。右の谷は湯増曾側本流、左は武能沢。この日、寮を7時に出たときは小雪が降っていたが、赤倉沢に近ずいた頃から快晴になると共に気温が急上昇。雪は重くなり、シールに付着するなど、ラッセルのスピードが急に落ちた。

96/ 3/ 3



武能沢を渡って最初の折り返しにかかる。
1940/1/11に雪崩で破壊された旧国鉄の小屋のあった
所はこの付近か? 96/ 3/ 3



87/12/28 快晴、翁村さんと七曲がりを登る。雪が少なく山側の木が夏道に蔽い被さり登行困難。
正面：武能岳、なかなか立派に見える



93/10/10 一人で蓮峰え、七曲がりの紅葉



93/10/10 七曲がりで見つけた季節外れの紫陽花



87/12/28 七曲がり上部、下の鉄塔下で藪と戦う
鎌カンの翁村さん



32/12/26, 白樺尾根直前、先頭三枝
串田孫一撮影



尾根にて、87/12/28

白 樺 尾 根



此の非難小屋は戦前はトタン葺きで冬には
使用不可能なちやちなもので、ブリキ小屋
と呼んでいた。



蓬峠一溜水峠、途中が抜けている、87/12/28



蓬 峠

戦前は小屋もなく、細い踏み跡があったのみで美しい峠であった。

小屋と七つ小屋山、83/10/10



36/ 7/20 家族と今村隆郎君。この時母は浴衣に草鞋履で登った。



95/ 7/27

日光キスゲが美しかった。 右に見える茶色の所は池塘で、
戦前は緑の笹の中で全く気がつかなかった。
小屋と道が目障りだ。



92/ 5/ 3 峠からの笠ヶ岳（同行；石橋、福田とその友人）
此の年は雪が少ないのでスキーはもって来なかった。



同日 武能岳 - 谷川岳

朝日岳（旧笠ヶ岳）と大倉沢

笠岳登頂記録

年月日	経路	同行者
1932/7/27	白樺小屋・清水峠	南条
8/25/	宝川	佐川
33/7/26	宝川	久野、立見、今村 ^弟
34/8/ 2	寮・大倉沢	上田
35/1/ 3	寮・清水峠	成瀬、上田、池田
73/9/17	寮・清水峠より宝川	成瀬



日光キスゲと朝日岳； 蘆峠より、 95/ 7/27

笠ヶ岳の池塘、 32/ 8/28

頂上の北にあり、左のピークで尾根が清水峠方向と巻機山方向とにわかれる。 73/9/19に成瀬さんと此処から宝川に降った時には、池塘の周辺に踏み跡が沢山あり、且つ網が張られて昔日の面影はなかつた。そしてここから宝川に下る道ができていた。 1932頃は清水峠からここまでの踏み跡さえなかつた。





95/ 7/27 (中学合宿) 蓬味 (単独) えの途中、白樺沢を渡る村近より



大倉沢の大滝、37/7/27のときは残雪は
此れ程無かった

大倉沢 と 笠ヶ岳



93/10/10 上記と略同じ場所より (単独)



嚴冬の笠岳—大倉山、32/12/28(?)、長島辰郎撮影

雪崩



マチガ澤の雪崩

中 屋 健 式

マチガ沢の雪崩

1980からほぼ毎年GWに虹芝寮に入るようになって、マチガ沢で雪崩の跡を見たのは二回あり、これは上部から押し出して来て湯檜曾川を乗り越え、さらに下流方向に向きを変えて、駐車場付近まで下ったものである。この雪崩が寮に行くとき最も注意しなければならないものである。

1984の雪崩

この雪崩が発生した時期は不明である。この年の4/28に円山、布施の両氏と入寮。非常に雪の多かった年で、湯檜曾をすぎて土合に行く途中の湯檜曾川の中州にはまだ雪が残っているのが見られ、土合橋からスキーをつけて入った。

マチガ沢の駐車場を過ぎて沢に下る少し手前に、径15-20cmの木が雪面から60cm位のところから谷川岳稜線方向に直角に折れていて之れに腰掛けて休んだことがある。付近の雪面から出ている木の多くは、湯檜曾川下流方向、または稜線方向に折れ曲がっていた（これらの状況を写真に撮らなかったのは失敗であった）。デブリはすでに融けて一面のザラメの緩い斜面となっていた。湯檜曾川の左岸には特に異常は見られなかったが、マチガ沢の上流から来た雪崩が湯檜曾川の左岸にぶつかり、さらに下流の駐車場方向に走ったものと判断した。

この年の9/1に成瀬さんのご遺族（夫人、長女）が遺品である愛用のスキーストックを寮に置きたいとのことで、熊崎君と一の倉駐車場経由で案内し、帰途は湯檜曾川沿いにマチガ沢に来たところ、現在の駐車場のところにトラック数台が倒木を搬出に來ていた。まだ手を付けていない稜線寄りの斜面には下流方向、または山側に倒された木が残っていて（写真、1）、上記の判断の根拠を示していた。

この時以後駐車場は逐次広げられていった。



Fig. 1. 現在の駐車場の南端付近

2000年の雪崩

2000/5/1に布施さんと土合橋を12/00頃出発。1984程ではなかったが残雪多く スキーを付けて登る。 マチガ沢非難小屋を過ぎて駐車場に入ると、その北端と覚しき所より残雪の表面が茶色となっていて、近ずいて見ると、細い木が略東西に雪面に押しつけられ、其の上に流木が散乱していた。 之れは駐車場とマチガ沢との間の若い木が押し倒された為である。 此処を通過するにはスキーを脱ぐよりはそのまま雪面に出ている枝を押さえながら乗り越えて行くほうが楽であった程密に木が押し倒されていた（写真2）。

此処を過ぎてマチガ沢に出ると左岸の崖は大きく崩れ（写真 4）、沢の中には径40cmもあろうと思われる枝や根を付けたままの倒木が散乱し、特に日当たりが良く雪が融けてしまった左岸の崖下にはこれらが重なり合っていた（写真 5a, b）。

雪崩は1984と同様、或いはそれ以上に大規模で、湯檜曾川を乗り越えて対岸の斜面に乗り上げ、この為に立ち木は山側に倒された（写真 6）。

雪崩の発生源は断定は出来ないが、上の国道を湯檜曾川沿いに進み、マチガ沢に沿って曲がって間もなく、道路に直角で幅15-20Mの木が薙ぎ倒された雪崩の通路と覚しきところがあり、この上部から雪崩落ちたのではなかろうか？

記録第2号に掲載されている中屋氏撮影の雪崩は、撮影日時・場所は記載がないが、1933/3/22-31に撮影されたものであろう（記録の出版が1933/12, 中屋氏の入寮は3/23-31, 寮日誌にはマチガ沢に入った記録はない）。3/25に小生、立見、中屋_君とマチガ沢に入り、国道の上でこの雪崩の跡に出合ったのである（記憶が定かでないが、この時同行の中屋_君が撮影した?）。 この時の雪崩は国道の少し上で止まっていた、湯檜曾川には達していなかったことから、1984, 2000の雪崩の凄まじさは想像を絶する。



Fig. 2. 駐車場後方の雪崩によって押し込まれた木。中央の東西の黒い部分（手前の雪との境）は駐車場の北端？。この手前の雪の上の木はほとんど雪崩による流木。（2000/5/1撮影）



Fig. 3a


マチガ沢の橋： 写真3aは1970/8/2に駐車場側から撮影。 3bは2000/6/16に撮影。橋の丸太を支えていた  の部分がなくなったのは1998の大水、或いは2000の雪崩によるかは不明。 GWの時はまだ雪の下で、この付近には雪崩で運ばれた倒木が沢山あった。



Fig. 3b



Fig. 4 崩れ去った夏道のあった崖、2001/6/19撮影。左岸の橋脚は無くなった。A：寮建設当時の夏道。 B：夏道のあた崖。 C：現在の道。



Fig. 5a 下のFig. 5bの右端付近から撮影したマチガ沢。橋脚は雪の下。
左岸の崖の近くは雪が融けて運ばれた倒木が多数現われていた。
写真の右側の暗く映っているところはFig. 4の崖（B）。
崖の上流を登りテレスえ。 2000/5/1撮影。



Fig. 5b 湯檜曾川との合流点。この付近は運ばれた
倒木や巨岩はまだ雪の下に埋もれている
（合流点の人物は布施氏）。 2000/5/1撮影



Fig. 6 駐車場から見た湯檜曾川左岸の雪崩による傾いた立ち木。 2000/7/1撮影。



Fig. 7 駐車場からカタズミ岩・武能岳。2000/3/19、浜田氏撮影

踏高会スキー大会が土合で3/18, 19にあり、19日有志が虹芝寮を訪れたがここを通過時に雪崩にはきずかなかったとのこと。雪崩の発生は3/19以後か、以前であって新雪に覆われて分からなかった？

上記の記事から鉄道の小屋を襲った雪崩の想定される通路は、寮から北西に3、40m位しか離れていないと思われるので、この通路について前々から関心を持っていた。
1994/4/29-5/4滞在したときに、国鉄の小屋を襲ったと同じ雪崩と思われる雪崩の跡を発見した。以下写真によって説明する。



Fig. 1. 寮を背にして芝倉沢方向を撮影。
寮のあるテレスの下にもう一つのテレスがあり、この付近で両者は一つとなる。ここは芝倉沢に下りる一つのルートである。



Fig. 2. Fig. 1を撮影した地点からカタズミ方向。
写真の中央の汚れていない雪は雪崩後のもので、ここで両テレスが一緒となる。



Fig. 3. 上記の位置から虹芝寮。この年はGWの残雪は少なく、寮の土台は出ていた。



fig. 4. Fig. 2の地点から寮のあるテレスに登る。枝や、幹の破片がカタズミ岩方向に散乱している。



Fig. 5. Fig. 4の更の上。地形は小さな谷状となる。右手の斜面は成蹊スロープの右端（上から見て）。



Fig. 6. Fig. 5の更に上。



Fig. 7. Fig. 6の更に上。



Fig. 8. Fig. 7付近の運ばれた倒木

1994/2/8-10は中国から東北にかけて低気圧による大雪があり、あわ雪崩がこの時に発生したかもしれない。

この雪崩に付いての考察

1943の時も橋本、田坂が記しているように倒木はなく、今回見た雪崩の跡にも倒木は見られないので、ここを通る雪崩はいずれも乾燥粉雪雪崩（通称”アワ”）で、小規模で立ち木を倒す程の勢力はないが、小屋を破壊する力には十分にあるものであろう。虹芝寮に付いては今の所特に心配することはないが、一般登山者に旧国鉄の小屋付近の幕営は1-3月末の間は避けるように知らせる必要がある。

今後成蹊スロープのガレ場が更に発達し広くなって（この可能性は十分考えられる）、写真で示した谷がこれにつれて大きくなり、必然的に雪崩の通り道が寮方向に転ずることは十分に考えられる。したがって、このガレの変化についての定時観測が望ましい。

GWにカタズミ沢に登ると成蹊スロープと旧国道との間に底雪崩のデブリに出会う。カタズミ沢の規模、成蹊スロープの上で傾斜が緩くなること、上記の写真で示したスロープ右斜面の谷の大きさ、等からみて、大規模な底雪崩が寮付近まで下降することはないであろう。

虹芝寮西南のガレ場の雪崩



Fig. 1a. 2000/7/1撮影。Aは1998から発達。
表面にかなり大きな岩石が散乱している。
Bはそれ以前のガレ、植生でガレが見えなくなった。

寮の水源に行く途中、寮より30-40mの所に左手から落ちて来ているガレ場があり、ここにはGWにはデブリがよく見られた。この雪崩は大きなものではなく、デブリは川を越えたことはないようである。

1998は下記のように全国的に豪雨に見舞われ、このガレ場の様相が変わり、写真に示すようにガレの発達方向が寮の方向に変わりつつあるように見受けられる。

従来のガレの上には笹や木が茂りはじめて、ガレが見えなくなってきた。

今後このガレ場の動きは要注意、定時観測が必要と考える。

5/15-19:	低気圧、近畿地方;	7/27-31:	大雨、東北-東海;
8/2-9;	前線、東北-中国;	8/11-19;	前線、全国;
8/25-9/1;	台風・前線、全国;	9/14-17:	台風・前線、北海道-四国;
9/21-24;	台風・前線、北海道-四国;	9/23-10/1;	前線、東海-沖縄;
10/13-20;	台風・前線、全国;		



Fig. 1b. 2000/4/28撮影。寮付近の残雪は少なかった。Bには笹が顔を出し、デブリは見られないのでこの年は雪崩が無かったか、極く小さなもので、そのデブリは既に消えたか。

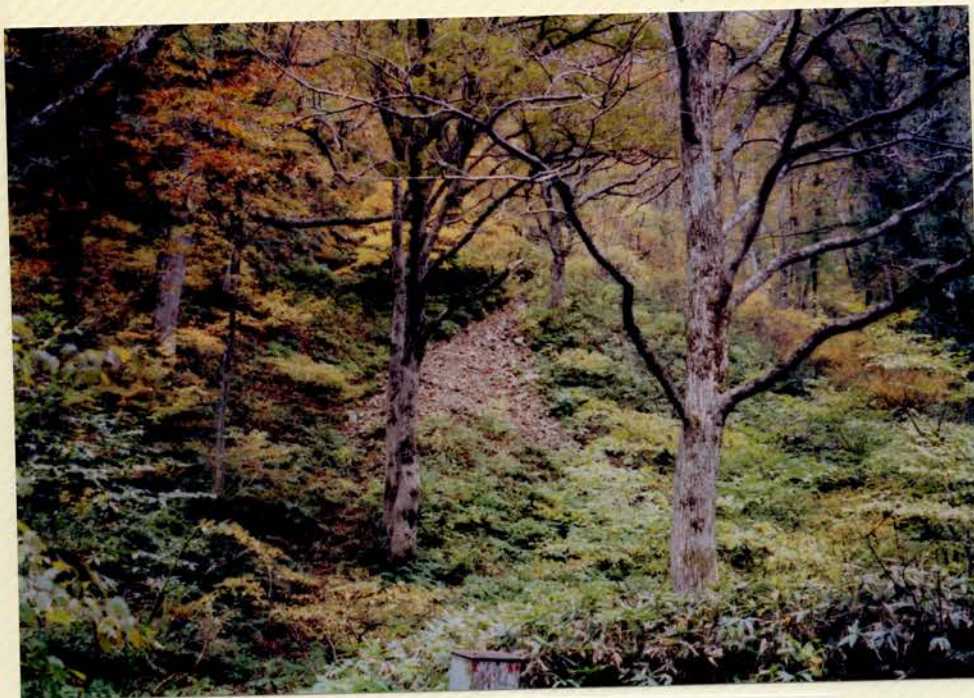


Fig. 2

Fig. 1と同年の秋(2000/10/28)撮影。
ガレ場の幅、端末の位置はFig. 1と変わっていないが、fig. 1で見られる大きな岩石は無くなっている。



Fig. 3

2001/6/16撮影。ガレ場の状態は前年の秋と全く変わっていない。一冬越しでもガレの表面には変化が無かったことは、冬は流水が無く、春の底雪崩も無かったことを示す。



虹芝寮西南隅に雪崩？

2000年（マチガ沢の雪崩のあった年）のGWは寮付近も残雪が多かった。寮の西南の隅（ガスボンベ置場）に木が折れて寄り掛かっていた。デブリはなく、積雪によるとも考えられる。

しかし、3/18, 19の土合での踏高会スキー大会で入寮した熊崎君の話では、雪が堅く締まっていた通常の時よりガスボンベを掘り出すのに手間取ったとのことで、ここまで表層雪崩が来たことを伺わせる。

雪はストーブのある部屋の窓は埋めていなかったとのことで、成蹊スロープ方向から小規模の表層雪崩が来たとするのは不自然で、寮西南のガレ場の雪崩が従来方向から向きを変えて寮まで来たのではないかと推察出来る。



a

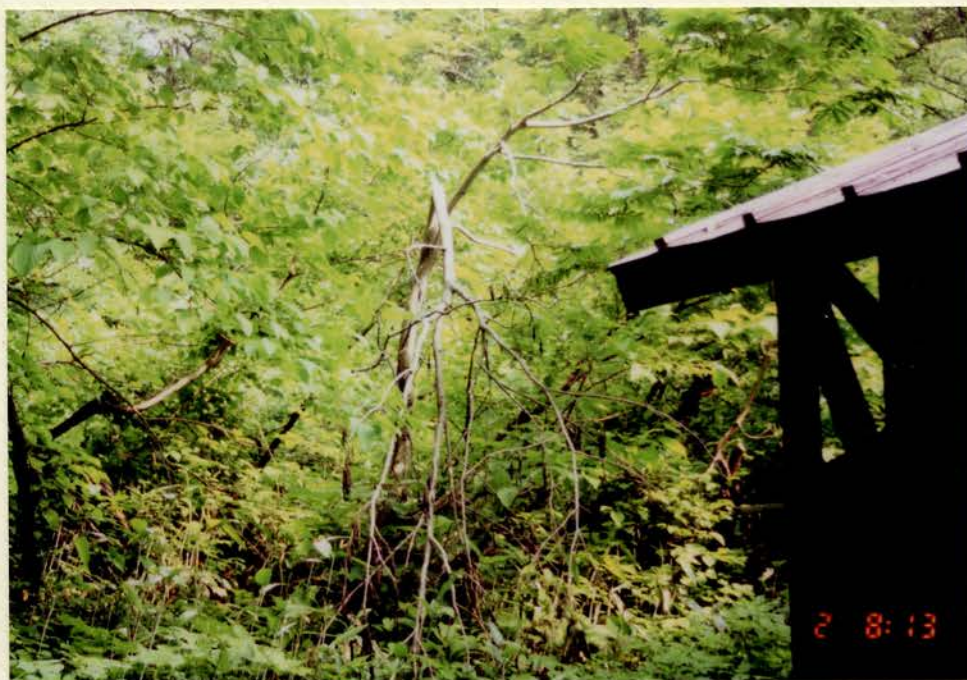


Fig. 2 2000/7/2



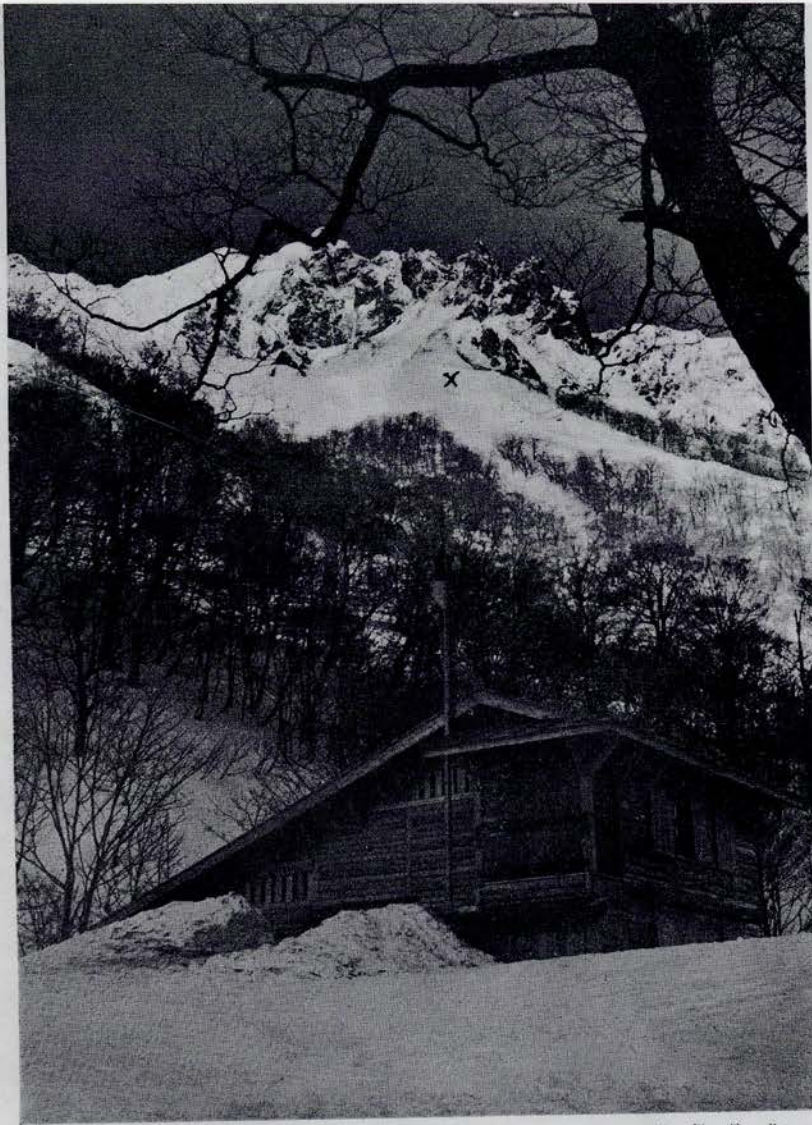
b

Fig. 1, a, b 2000/5/1

カタズミ沢の雪崩

1934/1/3の板状表層雪崩(人的)

快晴。上田、久野、中屋(弟)、串田、立見、西村、成瀬の7名はカタズミ岩より茂倉岳に登る目的でカタズミ沢右俣を登る。カタズミ岩下の広い急斜面をジグザグに登り、尾根近くでカタズミに向かって7名が一直線になった(写真、*)直後足元から板状表層雪崩発生、立見がそれに乗り150m滑落、一行引き返す。寮からはこの瞬間白煙が上がるのが見え一時一行を見失ったが、その後一名が下方にいるのが見届けられた。



中屋 敏 氏

1933/3/27のカタズミ沢左俣からの湿潤表層雪崩

前々日の25日は高曇り(この日登山のpartyは10名、三枝のpartyは7名)で夕方より雪、26日は日中曇り、27日は朝方雪、後小雨。午後一時晴れたのでカタズミ沢でスキー練習に出掛ける。三枝、今村(兄)、久野、他と三枝先頭で登り二股下50m位の所に来たとき右俣を登っていた先発隊から”雪崩”の声あり、見上げると丁度その時左俣より小さな雪崩(幅3、4m)がニョロニョロと出てきたので、一齐に左斜面に逃げたが、今村は先頭の三枝のシュプールに沿って逃げたためにこの雪崩に巻き込まれ、腰まで埋まって、5、6m流された。雪崩は停止すると急速に締まり、粉雪雪崩と異なって手で半身を掘だすのに30、40分を要した。

芝倉沢・湯檜曾川出合いの雪崩

芝倉沢の左岸で湯檜曾川との出合い近くは常に雪崩が出る。

- 1933/ 4/ 2: 17:00, 気温 5°C。芝倉沢出合い底雪崩（寮日誌）。
1933/12/20: 9:30, 気温 -2°C。成蹊スロープでスキー練習中発生。
成蹊スロープでは約4分間土を混じえた雪煙りで周囲が見えなくなった（寮日誌）。
1934/ 3/20 13:00, +2°C。デブリは対岸まで押し出し、小屋は相当ひどく揺れた（寮日誌）。
（以上の他寮日誌に記載が無いようであるが、これは慣れ子になった為か？）

1980以降、雪の非常に少なかった1987/12/28（同行翁村；蓬峠に向かう）を除き、下記のごとくデブリを見た。

- 1987/ 5/ 1 同行： 松平； 雪少なく蓬峠行きを中止、芝倉沢に入る
1993/ 3/ 3 同行： 塩沢、玉木（東北大OB）； 蓬峠（雪重く七曲尾根途中まで）
1996/ 2/17 同行： 小林、岩田（東北大OB）； 武能沢
1996/ 4/28 同行： 熊崎夫妻、鈴木； 赤倉沢

この4回の他はここを通らなかったもので、断言は出来ないが、ここの斜面は南向きのせいもあり、上記のように春・冬は勿論、時間も問わず発生するらしいので、通過には常に注意すること。

国鉄所有武能沢小屋の崩壊

1940(S15)/1/11午前8:30頃、武能沢の小屋が崩壊したことは、寮日誌に”あわ雪崩により”と記載され、小屋の崩壊はあわ雪崩の直撃と知っている会員も多いと思うが、実際は異なって、あわ雪崩そのものではなく、それに伴う風圧によるものであろうと、日本山岳会の会報92号に記載されている。

あわ雪崩に伴う風の力は相当なもので、通路の両側の立ち木等薙ぎ倒されて通路の両側が広い範囲で影響をうけることがある。

実際に、尾瀬原の景鶴山の南面の雪崩が其の例で、幅広く其の跡が残っていた（尾瀬原の東電小屋主人、萩原氏の言、写真は三枝撮影、1935/3）。

行五名は、卅一日微温湯を發してから猛吹雪に見舞はれ同夜はその中に立往生、眞先に求援を求めに走つた中村氏は行方不明となり、後になつて殘留者の報知によつて捜査を行つたが、二日死體となつて發見された。

朝日岳の遺難

日本登高會溝口千代松(三十四歳)小澤清一郎(二十八歳)兩氏は去る一月五日朝日岳頂上小屋に滞在すべく相當の食糧を用意し案内者一名を伴つて山麓の朝日鐵泉を出發したが、消息を絶つた。捜査隊は十三日より出動したが遂に發見し得ず一先づ切上げた。詳細後掲。

武能小屋の倒壊

上越國境湯楡川上流に在つた東京鐵道局所有の武能小屋は、去る一月十一日午前八時三十分頃、表層雪崩の餘波を蒙つて倒壊した。同小屋は昭和十年、登山客のために建設され、多くの便宜を提供してゐたものであつたが、倒壊當時は連日降雪あり約二米餘の新雪を見たため、小屋背後の白樺尾根に懸つてゐた雪庇の崩壊によつて表層雪崩が誘發され、文理大白樺ヒュツテの前を通過して湯楡曾川本流に落下した際、その一部が小屋を襲つたものと見られる。當時小屋には新潟師範教諭新谷茂氏(三十三歳)一行八名が泊つてゐて、朝食中であつたが、箸を置く間もなく雪崩に巻き込まれ、奇蹟的に雪中

より脱出した三名の手によつて他の五名も無事救出されたが、階下に居た小屋番父娘は發見せられず不安の中に夜を迎へた。助かつた一行も素足に丹前姿のままとして如何ともする能はず、スキー、靴等の發掘を俟たなければ求援にも走ることが出来ないので、そのまま文理大小屋に避難してゐるうち、十二日午前十時頃送電線巡視員の手により發見されたのである。生死不明の小屋番二名は救援隊の出動により、倒壊した小屋内の空際に生存せるを發見され、約三十時間の後幸運にも殆ど負傷もなく救出された。

倒壊の状況は三階のうち雪上に出てゐた二階は跡方もなく崩れ、屋根は約七〇米下方の武能澤内に、その他も二五米附近まで飛ばされてゐるが、遭難者の談話、附近樹木の損傷程度等より見て、雪崩そのものによつて倒れる以前に、風壓の影響によつて倒れたものと思はれる。なほ遭難者一行の沈着な行動は賞讃さるべきである。

ベデカリ岳遺難

北大山岳部のベデカリ岳登山隊は十二月三十日中札内を出發、コイボク札内川を経て目的地に前進を續けてゐたが、一月五日午後四時頃コイボク札内岳附近に於て雪崩に遭遇、一行九名のうち有馬洋、葛西晴雄、清水誠吉、戸倉源次郎、片山純吉、近藤達、羽田喜久男、渡邊達の八氏





